

2-4.岡崎城下の三大祭りにみる歴史的風致

(1)はじめに

本市の中心市街地は、江戸時代の岡崎城の城下町と東海道の宿場町岡崎宿が母体となっている。東海道と矢作川水運による物資流通及び交通の要衝として発展し、西三河地方の政治・経済の中心であった。太平洋戦争の空襲により市街地の大部分が焼失したが、大規模な復興事業によって現在の市街地の原型が形づくられ、戦後も西三河の中心地としての地位を継承し続けた。

菅生祭、岡崎天満宮例大祭、能見神明宮大祭の「岡崎三大祭」は、江戸時代の町割りの一部や寺社の境内がそのまま残る旧岡崎城下を舞台に、地域の人々が大切に守り続け、形を変えつつも毎年行われている。

表2-4-1 小風致の概要

小風致	建造物	活動
菅生祭にみる歴史的風致	菅生神社	菅生祭
岡崎天満宮例大祭にみる歴史的風致	岡崎天満宮	岡崎天満宮例大祭
能見神明宮大祭にみる歴史的風致	能見神明宮	能見神明宮大祭

(2)岡崎城下と城下の祭り

①岡崎城下

江戸時代の岡崎は、神君家康公の生誕の地、歴代譜代大名の城下町であると同時に、東海道五十三次の38番目の宿場町、また矢作川水運の基地として、賑わいを見せていた。

岡崎城下を通る東海道は屈折の多さで知られ、世に「二十七曲り¹⁾」と呼ばれている。二十七曲りは、延享2年(1745)の『東海道巡見記』には「宿町数五十四町、廿七曲りと云ふ。」とあり、町数²⁾とともに岡崎の町の特色を端的に表すものとして用いられている。東海道有数の宿場町でもある岡崎城下町は、寛文から元禄期頃までの江戸中期に東海道往還に面した町や周辺の町など合わせて領主支配の19町で成立していた。まちなみは東から西へと城内を経て連なり、19町のうち東海道沿いの町数は、投町(現在の若宮町)・両町・伝馬町(現在の伝馬通)・籠田町・連尺町(現在の連尺通・本町通)・材木町・下肴町(現在の魚町)・田町・板屋町・松葉町(現在の八帖町八丁町・中岡崎町)の10町で、それらの町なかを通る東海道の

¹⁾ 天正18年(1590)岡崎に入城した田中吉政は東海道を城下町に通した。その際、城下の道を防衛の必要性から屈折の多い道とした。また、江戸時代初期の本多家の整備により、城北へ大きく迂回され、城までの距離を伸ばすことで間道を利用して防衛することができた。

²⁾ 町(ちょう)=60間=約108メートルの長さ。

長さは合計で36町51間(約4キロメートル)もあり、東海道各宿の中で最も長いといわれる。

往還周辺の町数は、十王町・久右衛門小路町(現在の久右衛門町)・裏町(現在の^{みかげ}花崗町)・上^{さかな}肴町(現在の^{みかげ}花崗町・伝馬通)・六地蔵町・唐沢町・^{ゆうきん}祐金町・横町(現在の^{ほん}本町通)・能見町(現在の能見町・能見通・東能見町)の9町である。近世岡崎城下町はこれら城下町廻り19町と城主支配外の^{こうざん}甲山寺、^{そうじにじ}大林寺、^{しょうおうじ}総持尼寺、^{まんしょうじ}松應寺、^{ずいねんじ}満性寺、^{しゅいん}隨念寺、極楽寺など大小の朱印寺門前町が複雑に入り組んで構成されてきた。

天保末の『^{しゆくそんたいがいちよう}宿村大概帳』によれば本陣・脇本陣数は各3軒の計6軒で、これは小田原の8軒、箱根の7軒に続いて浜松・桑名とともに3番目の多さである。また一般旅行者のための^{はたごや}旅籠屋は112軒で、これも^{みや}宮(現在の名古屋市熱田区)の248軒、桑名の120軒に続いて3番目の多さである。以上の事実からも、岡崎宿は宿場町として東海道往来の重要な拠点の一つとして大きな役割を果たすとともに大きな賑わいをみせていたことがわかる。

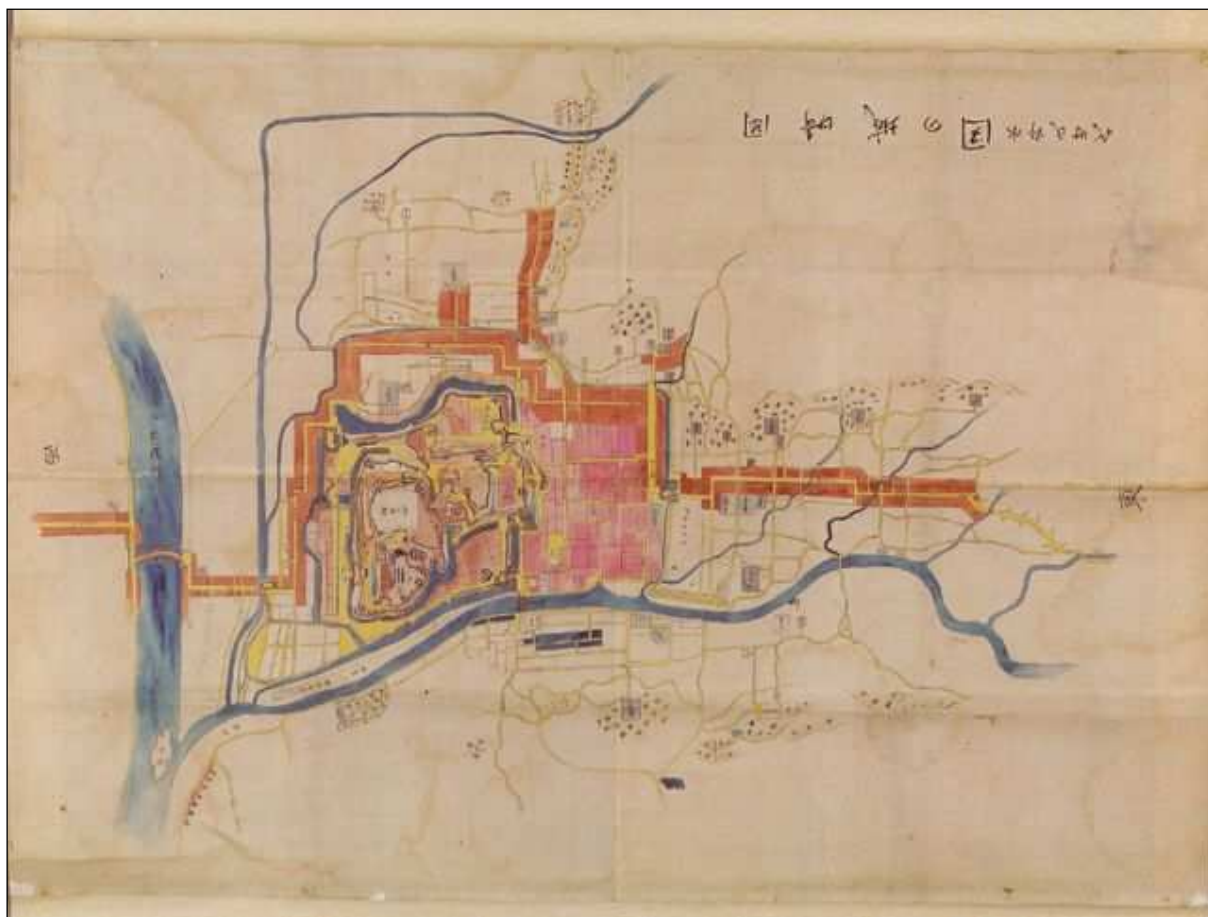


図2-4-1 水野氏時代の岡崎城図(正保2年(1645)～宝暦12年(1762))

②岡崎城下の祭り

東海道有数の宿場町として栄えた岡崎城下は、その経済力や街道の往来によりもたらされた文化等により、城下の発展とともに民衆の力も蓄積され、江戸時代後期には町が実質的なまとまりとなり、^{うぶすながみ}産土神や氏神³の神事や祭礼に合わせて華やかな祭りが行われるなど、次第に祭礼行事が興隆し、形態を変容させながら現在に受け継がれている。

江戸時代の庶民の楽しみは何といっても祭りであった。岡崎城下では、主要な祭りとして、^{すこうてんのうしや}菅生天王社(現在の菅生神社)、北野天神(現在の岡崎天満宮)及び能見神明宮の三大祭りが有名で、それぞれの氏子⁴が競って祭りを盛り上げた。当初は例祭日に神事が行われるのみであったが、江戸時代中期頃になると、東海地方で神輿や山車の巡行や、からくり・人形芝居・手踊りなどが盛んに行われるようになり、岡崎城下でも各神社が取り込んでいったとされる。江戸時代後期になると、花火奉納や派手な祭礼行列が定着するようになっていった。

こうして江戸時代後期には、城下でも大きな神社であった菅生天王社と北野天神、能見神明宮において、氏子が主役となって参加する形が生まれ、内容も創作性に富み、地域生活に根ざした祭りとなった。そしてこれらは武家、町人の身分的な枠を越えて共有され、両者に支えられることとなる。

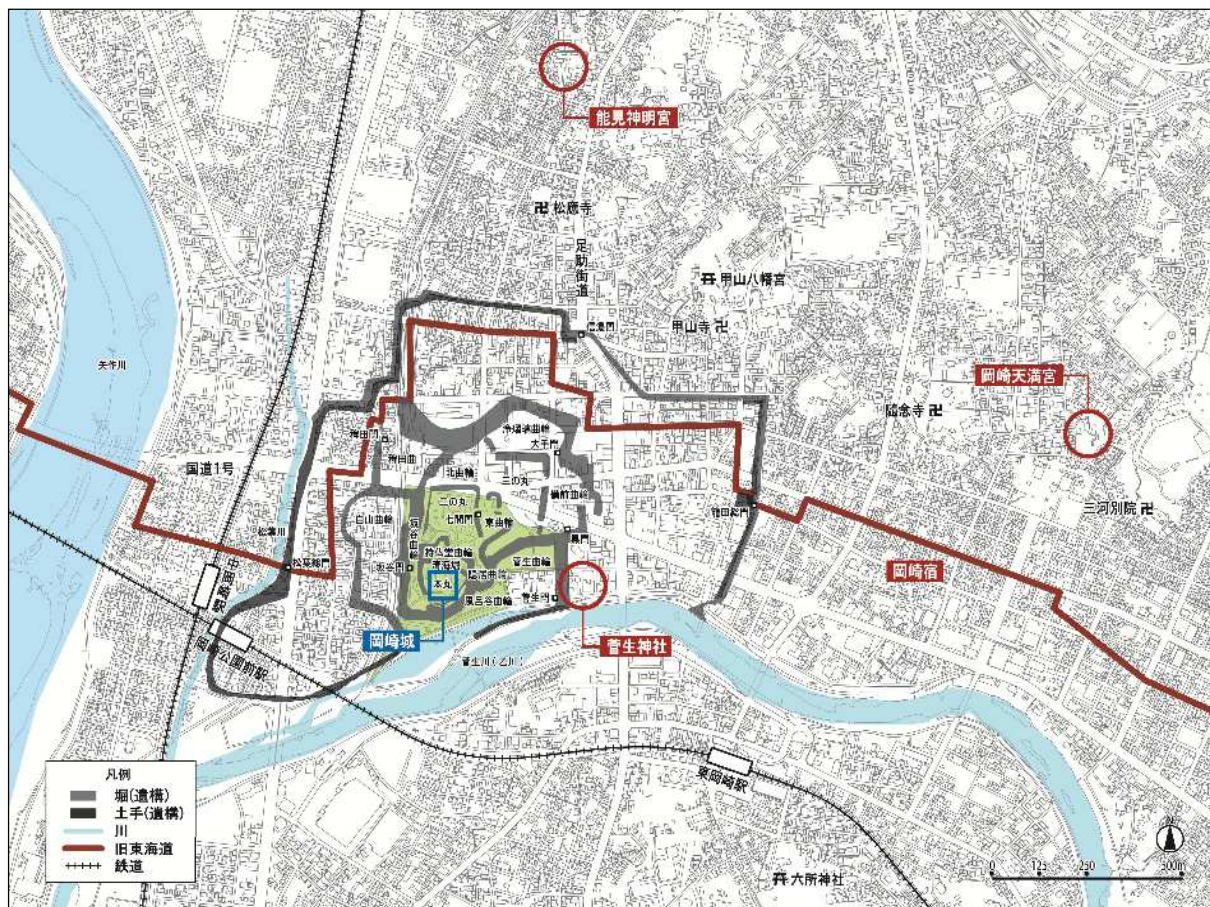


図2-4-2 岡崎城下と関連寺社等の位置図

³ 江戸時代後期では、町・村全体を守護してくれる神を産土神・氏神とも呼んだ。

⁴ 産土神・氏神の町民・村民を氏子と呼んだ。

(3) 菅生祭にみる歴史的風致

①はじめに

菅生祭では、7月19日の宵宮祭よいみやさい、20日の例大祭、8月第1土曜日の鉾船神事・奉納花火ほこぶねしんじの3つの祭事が行われており、鉾船神事・奉納花火は、岡崎の夏の風物詩として親しまれている。

②建造物

ア.菅生神社

社伝によれば、日本武尊やまとたけるのみことが菅生の地を通過した際、高石たかいわ(現在の菅生町)に伊勢大神を勧請し、吹矢大明神と称した。菅生神社が岡崎市最古の神社といわれるのはこの言い伝えをもとにする。永禄9年(1566)家康公が社殿を再建。その後、岡崎城内の当時の殿橋(菅生橋)の東側の地に移転し、歴代岡崎城主の崇敬を受けた城下の総鎮守となった。別名、菅生天王社。現在の本殿は明治27年(1894)、拝殿は明治38年(1905)に建てられたものである。本殿は、木造平屋建、入母屋造、いりも やづくり 葺瓦さんかわらぶきで、拝殿は、木造平屋建、切妻造、きりづまづくり 葺瓦である。昭和31年(1956)の写真には、現在と同一の社殿が写っており、その部材も相応に古いことから、昭和31年当時と同じ社殿と推測される。

祭神は、天照皇大神あまてらすおおみこと、豊受姫命とようけひめのみこと、須佐之男命すさのおのみこと、徳川家康公、菅原道真公。



図2-4-3 菅生神社の境内



図2-4-4 菅生神社(昭和31年(1956))

③活動

ア.菅生祭

a.菅生祭の歴史

厄災の除去を祈願した祭礼で、宝暦8年(1758)の『菅生天王宮年中行事』によれば、葦で作った8束の「疫柄やくがら」に疫神を負わせて流すというもので、疫病退散の厳粛な神事が中心であった。ところが、津島や吉田(豊橋市)の天王祭りの影響を受けたのか、文政5年(1822)の記録によれば、菅生川(乙川)に提灯を付けた鉾船ほこぶねが出され、管弦を奏し、船中から金魚花火⁵

⁵ 水上に浮かび金魚が泳ぐように動く花火。川の流れを火の流れと化し観衆を魅了したと伝えられている。

や手筒花火が奉納されるようになり、壮麗で賑やかな祭りに変化した。この背景には、城下における花火技術の拡がりがあった。文政元年(1818)には藩主上覧の花火大会が行われ、これには菅生町を始めとする城下各町がそれぞれ打ち上げを行っており、城下町の住民たちも花火の技術を習得していたことがうかがえる。大正11年(1922)の木版画にも、現在の祭りと変わらぬ様子が描かれている。江戸時代の例祭日は6月15日・16日であったが、現在は7月19日に「宵宮祭」、20日に「例大祭」、8月第1土曜日に「鉾船神事・奉納花火」の3つの祭事が執り行われている。「鉾船神事・奉納花火」は、昭和23年(1948)から「岡崎市観光夏祭り(平成26年(2014)度より岡崎城下家康公夏まつり)」の花火大会との共催(合同開催)で行われ、岡崎の夏祭りとして市民はもとより、近郷近在から多くの見物客が集まる祭りとなっている。



図2-4-5 鉾船からの奉納花火(大正11年(1922))



図2-4-6 鉾船での神事

b.現在の菅生祭

炎天の下、菅生町・本町連・康生連・祐金町・六地藏町・籠田町の各町からは氏子衆が長持ち唄を歌い、威勢よく足を蹴上げながら神社まで、花火玉の長持ちを担いで練り込み行列する。先導を先頭に高張提灯と大うちわ、大人用の長持ちに小型の子供用長持ちが並び氏子が続く。行列は岡崎城総構え⁶の東端にあたる中央緑道を出発し菅生川(乙川)沿いを進む。



図2-4-7 長持ち行列の練り込み

⁶ 城のほか城下町一帯も含めて外周を堀や土塁、石垣で囲い込んだ日本の城郭構造をいう。

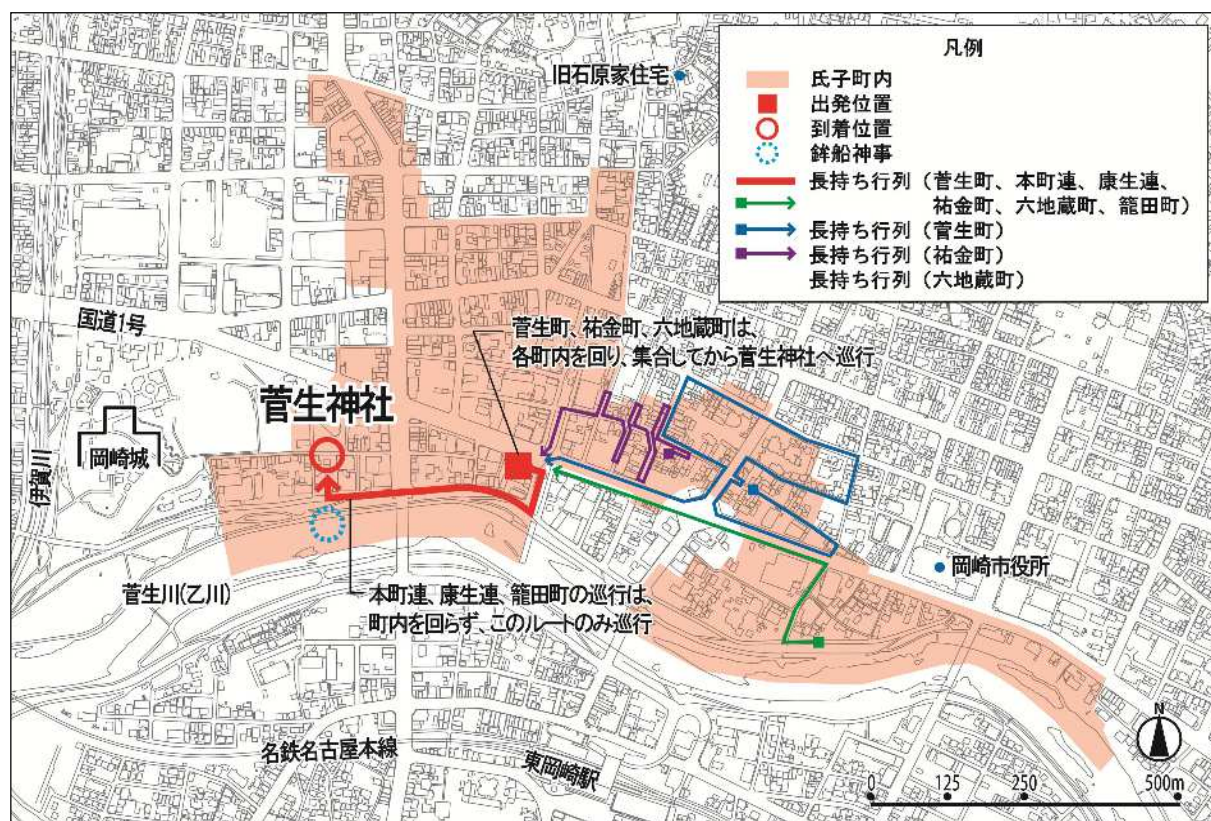


図2-4-8 菅生祭 氏子衆による長持ち行列巡行図

神社へ到着すると、神前に奉納者が3名並び、手筒花火を奉納する。本殿での神事が午後2時に開始。次に午後2時30分、花火観覧のための桟敷が敷かれた河原に面して浮かべられた2艘の鉾船、天王丸・菅生丸に宮司らが分乗し、安全を祈願する「船魂祭」が行われ、宮司の祝詞に続き、「鉾船神事」が始まる。これは船上から葦で編んだ舟形の中に人形、神葎を乗せ、菅生川(乙川)に流し、疫神を流すという御霊会ごりょうえの儀式を伝える神事である。午後3時30分、神前にて奉納手筒花火が行われる。宵闇の頃午後7時には、船上の提灯塔に一年の月数を表す12個の提灯を立て並べ、下方に傘状に一年の日数365個の提灯を点じた天王丸・菅生丸より手筒花火を打ち上げ、金魚花火を奉納する。現在でもこのように古礼に基づき、儀礼や祭礼が執り行われ続けている。



図2-4-9 鉾船に乗る様子(令和6年(2024)8月3日)



図2-4-10 鉾船神事(神葎流し)

④まとめ

岡崎城天守を背景に夜空を染める打ち上げ花火と、鉾船を照らし川面に映る金魚花火・手筒花火は、美しく風格ある景観であり、岡崎の夏の風物詩としての風情が感じられる。



図2-4-11 岡崎城天守を背景に菅生川(乙川)に浮かぶ鉾船と打ち上げ花火(令和6年(2024)8月)

(4)岡崎天満宮例大祭にみる歴史的風致

①はじめに

岡崎天満宮例大祭は、式月式日である9月23日から25日に齋行^{さいこう}され、長持ちを担いだ練り込み行列や奉納花火が行われており、歴史や伝統を感じ伝える祭礼である。

②建造物

ア.岡崎天満宮

元は総持尼寺の鬼門除けとして道臣^{みちのおみ}命^{のみこと}を勧請し、古くは北野天神、弓弦天神、伴天神と称した。元禄3年(1690)、菅原道真公を合祀して岡崎天満宮に改め、東海道岡崎宿の総鎮守として崇敬を受けた。社殿は、昭和20年(1945)に戦災で焼失したが、その後再建された。現在の本殿は、木造平屋建、入母屋造、棧瓦葺で、昭和33年(1958)に建てられ、拝殿は、昭和45年(1970)に建てられた。拝殿竣工時の奉祝祭後の写真が残されており、部材も相応に古く、昭和45年(1970)の建築時のものと推測される。祭神は菅原道真公・道臣命。



図2-4-12 岡崎天満宮(昭和45年(1970)3月25日)

③活動

ア.岡崎天満宮例大祭

a.岡崎天満宮例大祭の歴史

元は東海道岡崎宿の伝馬町を中心に行われた祭礼で、氏子は城下の大半を占め、祭礼は盛大であった。古き伝統を守り、祭礼日を変更せず、式月式日に齋行している。文政6年(1823)の『御祭礼警護行列帳』^{さいれいけいごぎょうれつちよう}によれば、神輿や花笠山車・子供の手踊り等の行列が行われたとある。安政4年(1857)には藩主本多忠民^{ただもと}が御馳走屋敷^{ごちそうやしき}⁷で見物した。同様の内容が、安政4年(1857)の『万留書覚帳』^{まんろしかきおぼえちよう}にも記されており、大人の手踊りが29番もあるなど、より派手になっている。その

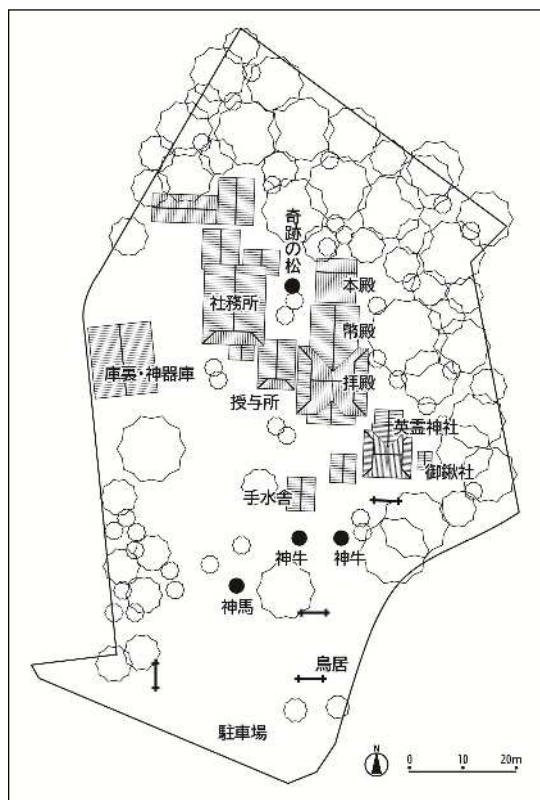


図2-4-13 岡崎天満宮境内図

⁷ 御馳走とは接待を意味し、屋敷は公用の役人等をもてなす、岡崎藩の迎賓館的な役割を持っていた。

後、江戸時代後期には、奉納花火も上げられるようになり、特に昼間の打上花火は有名で、「菅生さんの川花火、天神さんの丘花火」として知られていた。町内ごとに、だるま、将棋の駒、番傘など、特徴的な役物が打ち上げられたという。戦災後は、大規模な花火は民家の密集により休止されている。



図2-4-14 岡崎天満宮の境内

b.現在の岡崎天満宮例大祭

毎年9月23日から25日に齋行^{さいこう}される例大祭では、氏子衆が長持ち唄を歌いながら、天満宮まで長持ちを担ぎ練り込み行列する。以前は、氏子の一部の両町・中大門・中天神・東中が行っていたが、現在は、両町・中大門のみで続けられている。長持ち唄はどの町も基本的に同じ唄を踊りながら歌うが、イントネーションや細かい歌詞が町ごとに違う。

かつては筒場（現在の梅園公園辺り）があり、大規模な打ち上げ花火が上げられていたが、市街化に伴って行われなくなった。その後、各町で手筒花火が上げられていたが、平成15年（2003）頃からは、唯一、中大門のみが、天満宮境内で手筒花火を上げている。



図2-4-15 長持ち行列の練り込み



図2-4-16 岡崎天満宮の手筒花火

④まとめ

岡崎天満宮例大祭は、形を変えつつも現在まで受け継がれる貴重な祭礼である。寺社の門前や旧東海道など古くからの道筋を舞台に行われる練り込み行列や、岡崎天満宮を背景に奉納花火が上げられる様は、往時の風情を偲ぶことができるとともに、境内の南に広がる東海道岡崎宿であった市街地に思いを馳せることができ、歴史や伝統が感じられる。

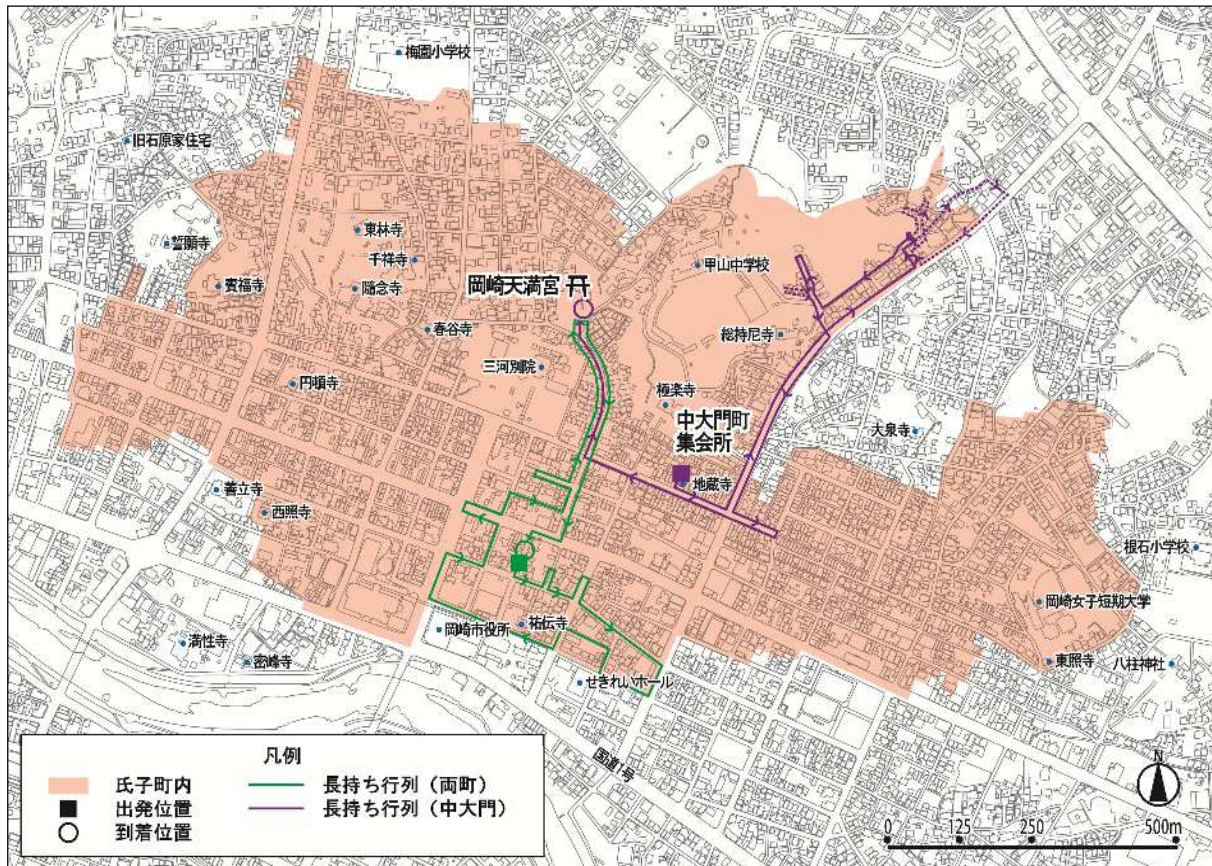


図2-4-17 岡崎天満宮例大祭の長持ち行列巡行図

(5) 能見神明宮大祭にみる歴史的風致

①はじめに

能見神明宮大祭は、5月第2日曜日及びその前日、翌日に行われ、御神輿渡御や山車の曳き廻しを特徴とする祭礼であり、岡崎城下の風情と岡崎の町人文化の伝統を今に伝えている。

②建造物

ア.能見神明宮

社伝によれば、創建は平安時代中期とされ、伝承によると、天正18年(1590)に田中吉政が岡崎城主になって城地拡大を行った際に、材木町久後にあった稲前神社(現在は稲熊町へ移転)を、この地に移転再興したといわれている。

明治3年(1870)の『神社取調帳』によれば、寛延2年(1749)に社殿を再建している。『神明宮社寺記録』(明治29年(1896)～大正14年(1925))によると、明治42年(1909)には拝殿が改築され、大正13年(1924)には神殿、神楽殿、石鳥居等が建立されている。拝殿は間口3間(約5.4メートル)、奥行3間(約5.4メートル)、本殿が間口1間(約1.8メートル)、奥行1間(約1.8メートル)で、いずれも切妻造、銅板葺とし、棟に千木・鯉木、破風に鞭懸を備えた神明造とされ、2つの社殿が切妻造の渡殿で繋がれて、3殿が縦一列に並んでおり、明治から大正期に建立されたものである。祭神は、天照皇大御神、萬幡豊秋津姫命、手力男命、豊受姫命、須佐之男命、市杵島姫命、五十猛命。



図2-4-18 能見神明宮の境内

③活動

ア.能見神明宮大祭

a.能見神明宮大祭の歴史

この祭りの起源について詳細は不明であるが、『諸用扣』(弘化3年(1846)～明治8年(1875))で存在を確認することができる。幕末には材木町東部の氏子を中心となって山車や花笠を作り、祭りに使うようになった。その後、明治25年(1892)の『神明社祭事録』によれば、その頃には祭りが現在に近い形で開催されていたことがわかる。祭りの重要な大行事は「御神輿渡御」と「山車の曳き廻し」である。「御神輿渡御」が大祭の静の象徴であるならば、「山車の曳き廻し」は動の象徴といえる。

明治の頃までは2層式、3層式であった山車は、電線が引かれるなどの道路事情により、現在の山車へ改造・新造されたものの、いずれも趣がある。山車の曳き廻しも、戦争の拡大

により、昭和 11 年(1936)にいったん休止されたが、昭和 27 年(1952)に再開した。各町独特の昔から伝わる「お囃子^{はやし}」を大人から子供へと、代々伝えて行くのも良き風習となっている。現在も「神明さん」の愛称で親しまれている。

b.現在の能見神明宮大祭

現在は5月第2日曜日及びその前日、翌日に行われる。江戸時代後期からほとんど変わることなく現代に引き継がれてきている「御神輿渡御」は、神明宮の御神体を神輿に移して氏子町を巡る祭礼の重要な神事である。境内には花笠梵天が参道の両脇に立てられ、東西には芝居の舞台と山車がずらりと並ぶ。先獅子と呼ばれる金色の獅子を先頭に進む数百メートルの行列は、まさに平安絵巻と呼ぶにふさわしいもので、各町に設けられた御旅所^{おたびしよ}⁸では町の安全と繁栄を祈願して御祓いが行われる。

現在、神明宮の氏子には8台の山車があり、各町の特徴を表した法被^{はっぴ}やゆかた姿も勇ましい大人や子供の手によって、各町独自のお囃子を奏でながら、江戸時代に重要な街道筋であった足助街道を始め、氏子町内を曳き廻される。明治頃までは2・3階建てであったが、道路事情や電灯、電話の引き込み線等のため、現在では平屋建ての形に改造されている。町の辻々で止められた山車の前面からは舞台が引き出され、管弦・太鼓に合わせて子供たちの手踊りが披露される。氏子の家の女兒が踊り子となり、身内の人は山車について回って「花」と呼ばれる御祝儀を入れた包み紙を投げる。お囃子や踊りで彩られた山車曳きで、祭りの雰囲気は一層華やいだものとなる。夕方には各山車が神明橋に集まり、いよいよ祭りのクライマックス「山車宮入り」が始まる。午後7時を過ぎた頃、全ての



図2-4-19 能見神明宮の御神輿渡御



図2-4-20 御旅所



図2-4-21 能見神明宮の山車の曳き廻し

⁸ 御神輿車が留まる場所のことを指し、町内に神が立ち寄る場といえる。木垣（井桁とも）と呼ばれる木製の枠の中に清砂を盛り、四方を忌竹と注連縄で囲った形をしており、各町が用意し、神聖な場所として清砂をまたぐことは禁止されている。

山車の提灯を一斉に点灯し、高張提灯を先頭に動き始める。

そして、およそ2時間をかけて、氏子各町をお囃子の音を響かせながら廻り神明宮に向かう。境内に集結した後、8台の山車の舞台では奉納の舞が華やかに行われる。このとき、祭りは最高潮に達する。山車の練り歩きは、松本、元能見中、元能見南、城北・元能見北、能見北、能見中、能見南、材木二丁目の順番で、毎年1町ずつ繰り上げて行われる。前日祭の夜、神社境内において手筒花火が奉納される。打ち上げ後の花火の筒は縁起ものとされ、火災除けとして玄関等に飾られる。



図2-4-22 能見神明宮の奉納の舞

④まとめ

市街地の多くで、狭あいな道路など江戸時代の町割りが感じられ、特に松本町周辺は、永禄3年(1560)創建の家康公の父・松平広忠の菩提寺・松^{しょうおうじ}應寺があり、江戸時代にはその門前町として、また大正から昭和40年代までは花街としても栄えた場所で、空襲により町の8割が焼失したものの、松應寺周辺の随所にその面影が残されている。祭りの時期には、岡崎城下の風情と伝統が感じられる場へと舞台転換するのである。

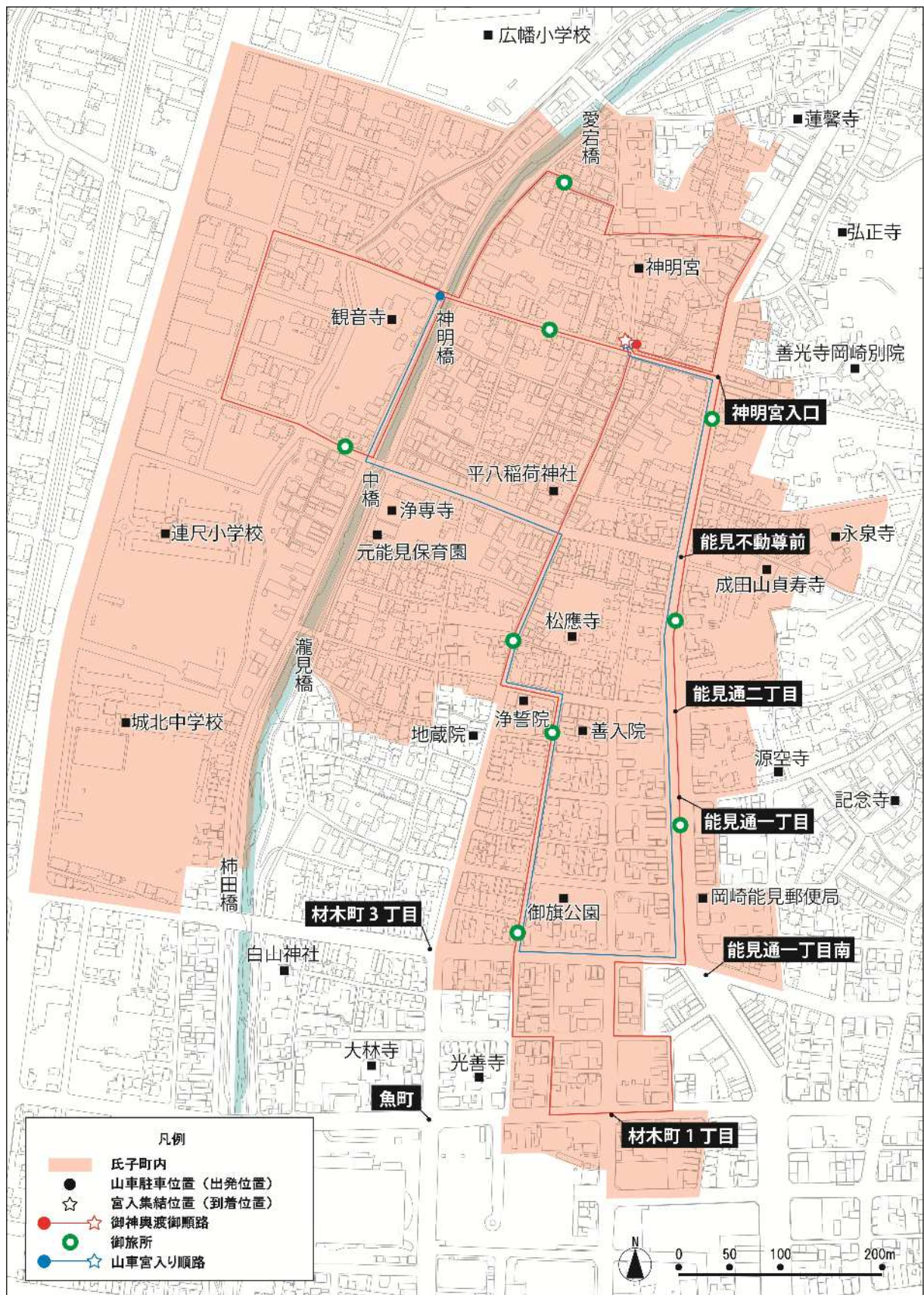
こうした昔ながらの祭礼風景を今に残す祭りは貴重であり、巡行する町筋の歴史性と相まって、往時の風情を偲ぶことができるとともに、中心市街地における岡崎の町人文化の伝統が感じられる。



図2-4-23 能見神明宮境内に集結した山車

表2-4-1 能見神明宮の山車

町	概要	山車
松本町	建造時期:昭和 35 年(1960)。各所に「矢作橋行列図」や「天の岩戸図」等(江坂兵衛)の彫刻。平成 14 年(2002)、二世前代の山車に飾られていた彫刻「陰陽の龍」が復活。前面から引き出された舞台の上で手踊りを披露。	
元能見中町	建造時期:昭和 28 年(1953)(花車)。昭和 32 年(1957)改造。正面に「牡丹」の彫刻。左右に「神文五三の桐」の透かし彫りにし、牡丹の花・藤の花の友禅夢樹の行灯仕立。友禅夢樹(久恒俊治)の行灯は全国伝統的工芸品入選。舞台を引出し、手踊り披露。	
元能見南町	建造時期:昭和 33 年(1958)。総白木造りで一本の釘も使われていない。天井の真中に「龍」の彫刻。外側の前面と側面にも「龍」の彫刻を配置。引き出した舞台の上で子供たち(小学生以下)が踊りを披露。	
城北町 元能見北町	建造時期:不明。昭和 31 年(1956)材木町から譲り受けた。山車前面は彩色箔押しされた彫刻で装飾。明治頃までは2・3階建てであったが、道路事情や電灯、電話の引込線等のため現在の形に改造された。	
能見北之切	建造時期:江戸後期に建造された高層式山車を明治中期及び昭和 31 年(1956)に改造。壇箱上山笠形、中備等の彫刻は文政5年(1822)瀬川治助重定の作で主題は「雲水龍」、「波紋」、「唐獅子」、「雲鶴」等である。山車前面より舞台を引出し、子供たちによる踊りを披露。	
能見中之切	建造時期:昭和 28 年(1953)。彫刻「鳳凰」、「龍」(懸魚)、「蓮」、「鶴」(欄間)等。水引幕に赤地に能見中之切、腰幕に紺地に阿吽の獅子、見返り幕に赤地に能中。前面の引出し式の舞台で子供たちが日本舞踊を氏子町内で披露。	
能見南之切	建造時期:明治初期。各所に極彩色の彫刻。前面の柱には「昇龍下龍」の目にさらしが巻かれており、これを外すと祭礼に雨が降るといふ言い伝えがある。辰年に巻き変えられる。山車から簡易舞台を引出し、踊子連が3曲ほど披露。	
材木二丁目	建造時期:大正4年(1915)。黒・赤の漆塗り。彫刻「獅子」、「龍」、「象」、「仁王像」、「狛犬」等。天井には昇り龍を中心に彩色された四季の花鳥がとり巻く天井絵が描かれている。山車の前面から引き出された舞台の上で手踊りを披露。	



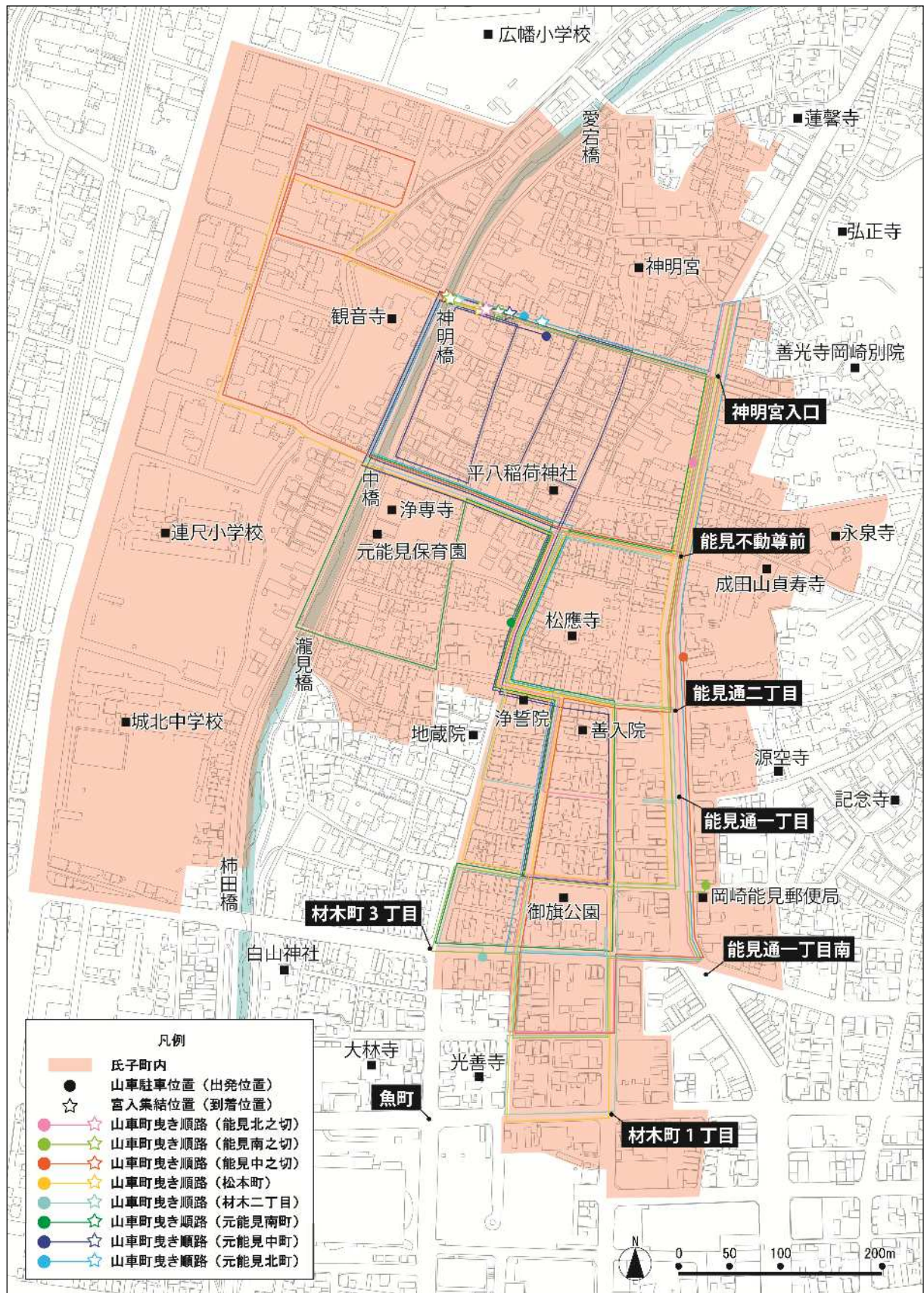


図2-4-25 能見神明宮の山車町曳き図(令和7年(2025))

(6)おわりに

現在では町名変更がなされ、旧来の町名は通称となっているが、自治会組織やその運営、そして祭礼において旧町名のまともりは存続している。お囃子の練習等を通して、町内の人間関係が築きあげられるなど、祭礼形態や運営のあり方はその町の性格と密接に結びついており、祭礼の変容は町の展開の一つの表れでもあるが、祭礼は大人から子供たちへと伝えられ、伝統文化を継承していく重要な場となっている。

このように、神輿を担ぎ、山車を曳き回す氏子の勇壮な姿や奏でられるお囃子の笛等の音色は、江戸時代から連綿と行われてきた祭りの華やかさや、歴史や伝統を反映した人々の心意気を今に伝えるものであり、旧岡崎城下の市街地を舞台に受け継がれてきたこれらの祭礼は、良好な景観を形成し、岡崎城下として栄えた往時の賑わい^{ほうふつ}を彷彿とさせ、本市固有の歴史的風致を形成している。

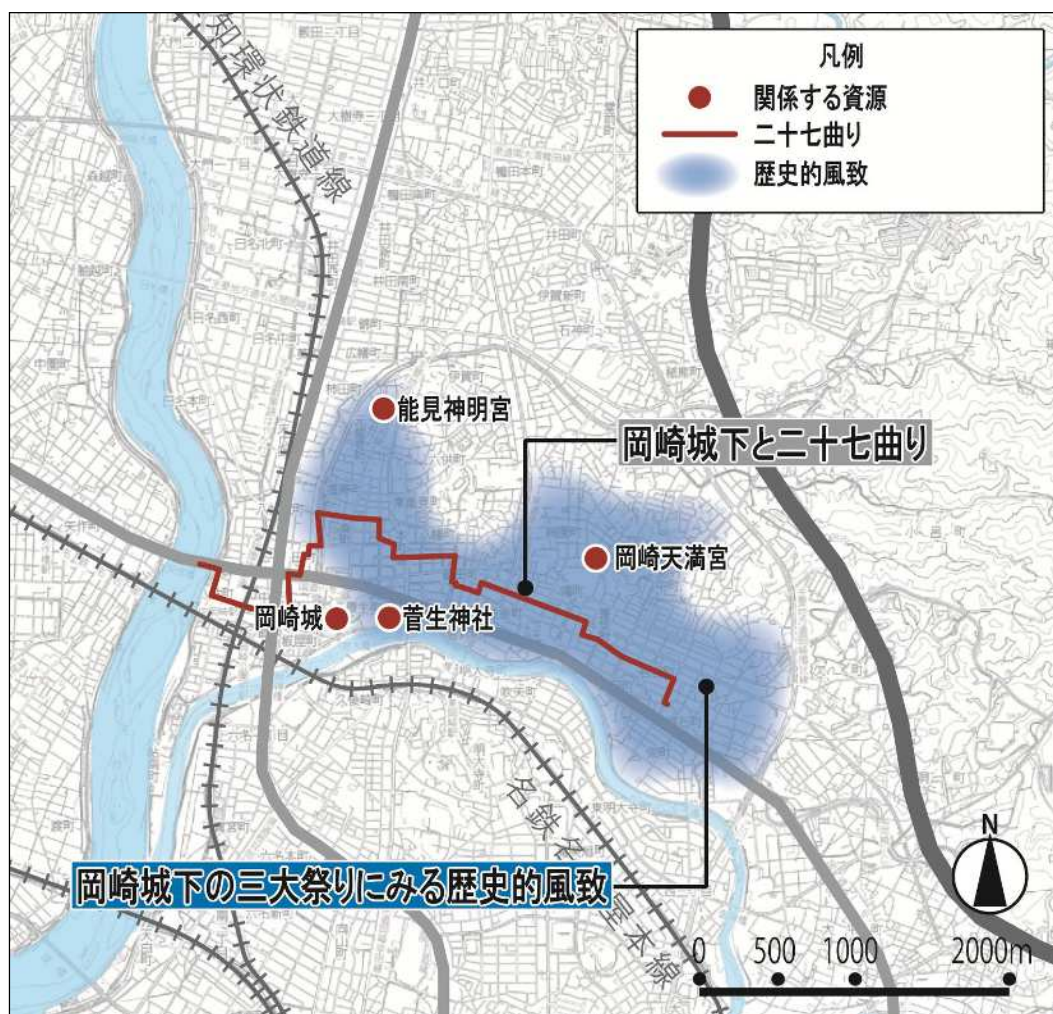


図2-4-26 岡崎城下の三大祭りにみる歴史的風致の範囲

2-5.郷土食の八丁味噌造りにみる歴史的風致

(1)はじめに

八丁味噌は、17世紀の江戸時代初期から、旧東海道を挟んで立地する2軒の老舗が300年以上続く昔ながらの伝統製法により製造する豆味噌¹で、現在に至るまで岡崎を代表する地場産業及び名産として全国的にも名高い。両家は「カクキュー²」、「まるや³」の屋号で現在も八丁味噌の製造を続けており、八町村(現在の八丁町)に立地したことから、「八丁味噌」という名がついたとされる。

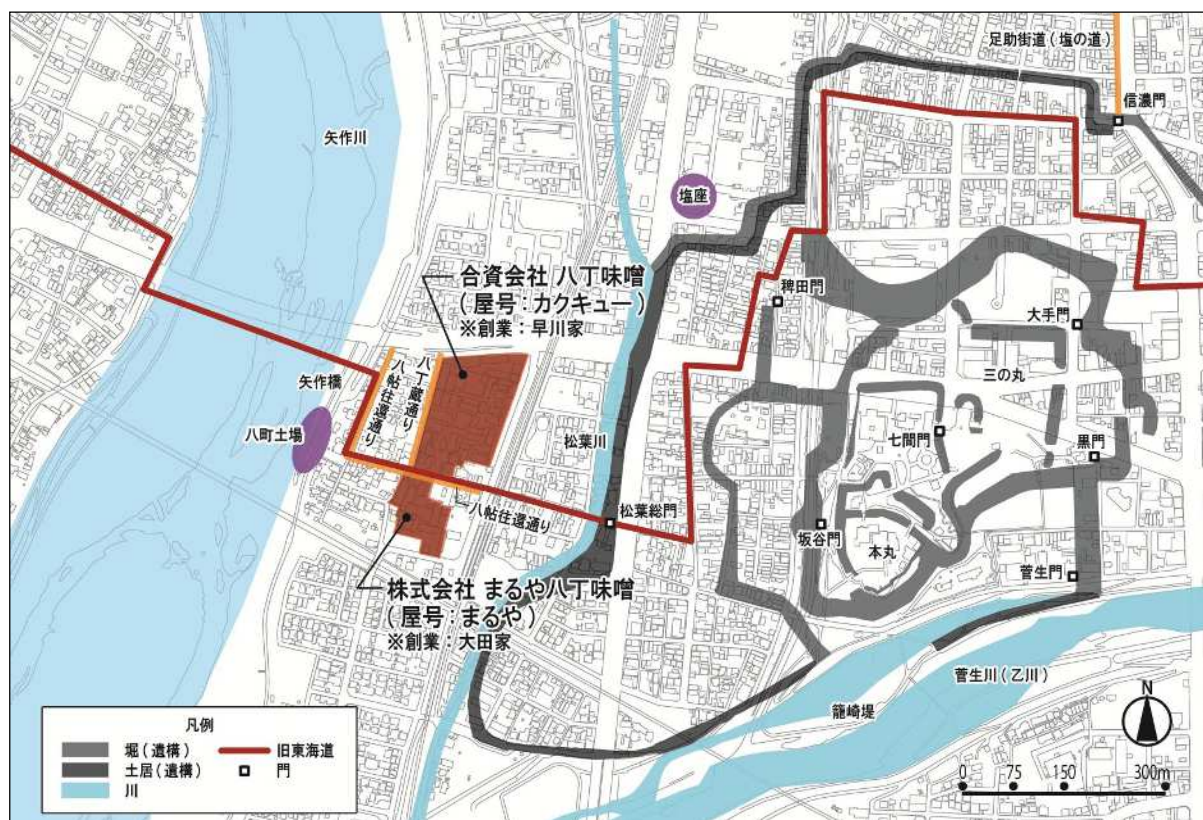


図2-5-1 八丁味噌2軒の位置(江戸時代後期の絵図を現在の地図に重ねたもの)

¹ 大豆を原料にした豆麴を使用して作る味噌

² 合資会社 八丁味噌(創業：早川家)

³ 株式会社 まるや八丁味噌(創業：大田家)

(2)建造物

①八丁味噌本社事務所、蔵(史料館)

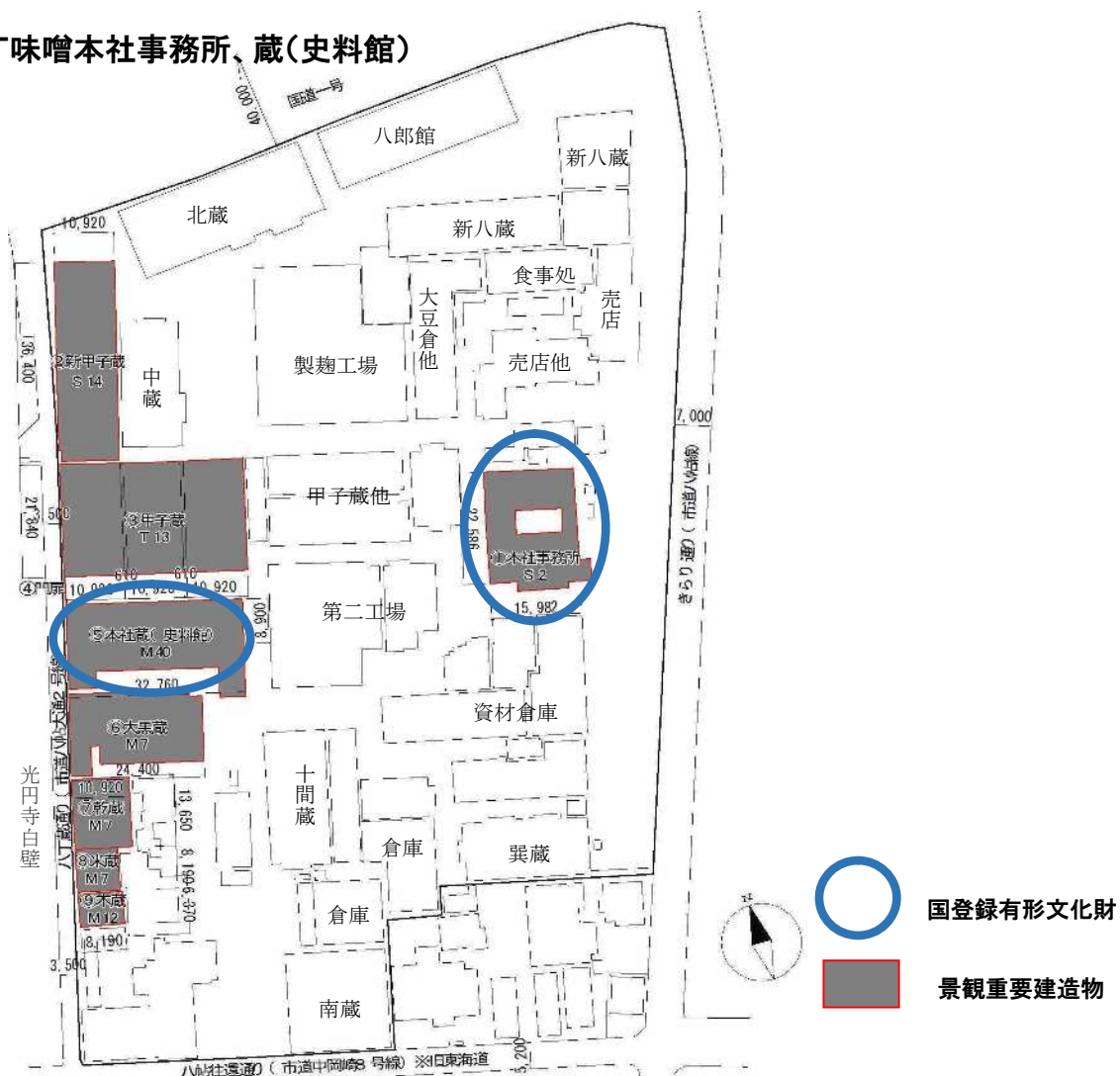


図2-5-2 カクキュー建造物配置

味噌造りが行われている敷地内には、その活動の舞台となってきた歴史的な建造物がいくつもある。カクキューの本社事務所(国登録有形文化財)は、昭和2年(1927)に建築され、南北2棟が中庭と土間を挟んで接続し、現在も本社として使われている。ともに2階の外観は西欧のバシリカ⁴式教会堂風の構成となっており、柱の白い部分と壁面の濃茶色とを対照させた意匠が特徴的である。内部は洋風の意匠でまとめられており、この建築の型は、当時わが国で行われていた古建築模倣様式の一例である。



図2-5-3 ①カクキュー本社事務所

⁴ 建築の平面形式のひとつで、中央の身廊の2辺ないしはそれ以上の辺を、側廊によって取り囲むものをいう。

カクキューの本社蔵(史料館)(国登録有形文化財)は、明治40年(1907)に建築され、大規模な総二階の土蔵建築で、昭和40年代中頃まで味噌仕込み用の蔵として使用されていた。石垣の基段上は黒塗りの板張り壁面とし、二層目は白漆喰塗りである。蔵のすぐ近くを矢作川^{やはぎがわ}が流れているため、水害に備え、花崗岩の石垣を高く積み上げたその上に蔵が造られており、壁面に開けられた格子窓の連続するさまが特徴的である。平成3年(1991)には、伝統の味噌造りが一目でわかる史料館として改修し、人形を使って仕込みや大豆を蒸す様子を再現するほか、宮内省御用達、岡崎藩との関係、八丁味噌の優れた品質を表する賞状や記録など、貴重な史料を展示し、その歴史や文化を内外に伝えている。

これら2棟は、平成8年(1996)に愛知県で最初の国登録有形文化財に登録された建造物であり、その外観は重要な景観資産となっている。

また、特に八丁蔵通りは、新甲子蔵から本蔵まで、明治・大正・昭和初期の年代の蔵が連なっており、花崗岩の石垣、味噌製造業者の信仰厚い光円寺の白壁、そして味噌蔵群の統一感ある黒壁のコントラストが約180メートルに渡って特徴的な景観を構成しており、ほのかに漂う味噌の香りに、今も続く伝統的な地場産業の風情を味わうことができる。



図2-5-4 ⑤カクキュー本社蔵(史料館)



図2-5-5 ⑤カクキュー本社蔵(史料館)

図2-5-6 ②新甲子蔵
(昭和14年(1939)建築)図2-5-7 ③甲子蔵
(大正13年(1924)建築)

図2-5-8 ④門扉

図2-5-9 ⑥大黒蔵
(明治7年(1874)建築)図2-5-10 ⑦乾蔵
(明治7年(1874)建築)図2-5-11 ⑧米蔵
(明治7年(1874)建築)



図2-5-12 ⑨本蔵
(明治12年(1879)建築)



図2-5-13 ②～⑨八丁蔵通りの全景

②まるや八丁味噌事務所、土蔵



図2-5-14 まるや建造物配置

まるや事務所は、明治6年(1873)に建築された。切妻造、瓦葺、平屋建ての建造物で、西側増築部には採光、通風のための縦に格子状に開口部を設けた虫籠窓があり、古いまちなみの風情を色濃く感じさせる建造物である。低湿地のため採用された石垣の基礎が今も残っており、外壁上部は漆喰仕上げで木組格子をもっている。この意匠は、明治43年(1910)頃の写真でも確認



図2-5-15 まるや事務所

できる。

まるや八丁味噌土蔵は、文政4年(1821)及び大正6年(1917)の修理棟札があることから、文政4年(1821)以前には創建されたと推定されている。木造2階建、切妻造、瓦葺の建造物で、外壁上部を白漆喰仕上げ、腰壁は下見板張りとし、3面に庇と窓が付く。現在は、まるや事務所に隣接しているが、明治5年(1872)の屋敷図では、現位置に描かれてないため、明治～大正期に屋敷南方から移築されたと考えられている。

この地域固有の景観を特徴づけているとして、平成26年(2014)にはまるや事務所が、令和2年(2020)には土蔵が、景観重要建造物に指定された。

この八丁地区は、我が国の主要幹線である国道1号に隣接するも、旧東海道沿いを中心に八丁味噌関連の歴史的な建造物等が建ち並び、地場産業と住宅が共存する、落ち着いた環境で、平成18年(2006)には、NHKの連続テレビ小説「純情きらり」の舞台となるなど、地域固有の歴史的なまちなみ景観が形成されている。



図2-5-16 まるや事務所(明治43年(1910)頃)



図2-5-17 まるや八丁味噌土蔵



図2-5-18 カクキュー本社の完成理想図

昭和初期に描かれたカクキュー本社の完成理想図

※服部臣宏氏作成

現状はほぼこの絵にそって建築されてきた。(中央左下が昭和2年(1927)年完成の現在の本社事務所)

(3)活動(八丁味噌の製造)

八丁味噌がこの地で産業として発展したのは、原料の調達、醸造の環境、製品の運搬の面で、味噌造りにとって最適な場所であったことが大きい。この地は、南北の矢作川の舟運と東西の旧東海道が交わる水陸交通の要衝であり、江戸時代には矢作川に土場(船着場)、岡崎宿に塩座(塩の専売)が置かれたことから、原料となる大豆や塩を入手しやすく、さらに矢作川の伏流水という良質な湧水や温暖な気候風土など、味噌造りにとって三拍子揃った立地条件であった。



図2-5-19 矢作川の舟運(大正時代)

①大豆の仕入れ

八丁味噌の主たる原料である大豆を、いかに適正な品質と価格で大量に入手するかが重要であった。

早川家の「大豆買帳」に記載された主な仕入れ先・仕入れ量によると、地元から仕入れた大豆は、盆大豆(古盆・新盆)と総称されており、また仕入れ先の場所名から、地元大豆(矢作大豆)、吉田⁵大豆、知多大豆等とも呼ばれていた。他国より仕入れたものは、関東では上州大豆、武州大豆、東北では仙台大豆、越後大豆、宮古品などがあり、特に港名で大豆名を記載しているものがあることから、舟運との関係がうかがえる。

大豆の仕入れは7月から11月までが大半で、関東・東北方面がその6割以上を占め、地元の割合は低かった。地元大豆が少ないのは、周辺から人馬で少しずつ運ぶよりも、遠方で大量に生産される良質な大豆を、海運の進展、特に江戸廻船⁶の発達により、大量に入手できたこと、また三河木綿⁷や味噌製品等を運搬する帰り荷

辰十月十四日ツミ	辰十月十六日	平坂	石川小右衛門
三拾貳匁 取済	古越後大豆	三拾貳匁	
川舟賃 八百六十六文	内		
辰十一月廿日拂	・印	拾九匁	三斗九升三合入
	・印	六匁	三斗八升入
	・印	七匁	四斗七升六合入
	・此石	拾三石七升九合	
	両ニ	壹石貳斗かへ	
	代金	拾五兩三分ト八匁九分五厘	
	外ニ	三匁二分 俵直し	
	金	拾五兩三分ト拾貳匁分五厘	
	差引留帳へ付出し	己正月三日	
	平坂	兵助船	

図2-5-20 早川家「大豆買帳」(寛政8年(1796))

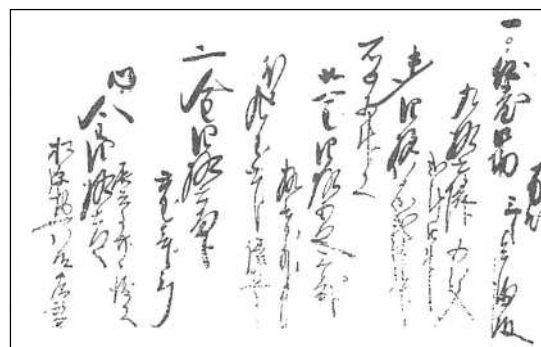


図2-5-21 早川家「大豆買帳」(天保15年(1844))

⁵ 旧幡豆郡吉田町。現在の西尾市。

⁶ 江戸時代において、江戸・大坂間の港で運行された貨物船のこと。

⁷ 三河は全国有数の木綿の産地として江戸にも多く流通した。

として、安く入手できたことが大きな要因である。関東・東北方面からの仕入れ大豆は、江戸・大坂を経由する廻船によって海上輸送され、三河湾の矢作川口で川舟に積み換えされ、八町土場で荷揚げされた。

②塩の仕入れ

塩も八丁味噌造りにおいて重要な原料であり、生活必需品でもあったが、江戸時代には塩座による専売が行われており、その統制下に置かれていた。

早川家で仕入れていた塩は、「饗庭塩」といい、鉄釜によるニガリが少なく、粒が細かい上質の真塩で、味噌醸造に適していたため、矢作古川河口付近(現在の西尾市)にあった大岡屋鈴木健治から仕入れ、その他若干量を特定の岡崎城下・田町塩問屋から購入していた。一方、大田家も同じく「饗庭塩」を吉田村(現在の西尾市吉良町)の塩問屋より仕入れていた。

塩の仕入れは、三河湾沿岸部の製塩地から舟運で矢作川を上り、塩座を通して行われていたが、明治元年(1868)の幕府崩壊とともに塩座の特権が喪失し、運上も徴収されなくなった。

※岡崎の塩座

天正年間(1573～1592)に織田信長旧臣の国分家こくぶんが尾張熱田より八町村に移り、松平氏の軍事物資を扱う商人となり、塩屋を営んだことに始まる。慶長12年(1607)の矢作川の洪水によってこの地が大きな被害を受けたため伝馬町に移り、同じく洪水から町を救済するため塩の商売を願い出た田町とともに慶長14年(1609)に許可された。塩座を経た塩は、馬の背に積み替え足助あすけまで運ばれたことから足助街道⁸は塩の道ともいわれる。

年 代	関東	東北	九州	西三・知多	東三	そ の 他
天明7	55%	37%	3%			
〃 8	52	13		10%	10%	
寛政元	76	10		15		
〃 2	67	26				7%(越後)
享和元	63		6	12	20	20(浜)
〃 2	16	60				
〃 3	90		10			
文化元	20	34			40	
〃 2	53		4		31	5(浜)6.5(大津)
〃 3	9	53	19		13	
天保15		31		58		
弘化2	15	6	7.5	54	3	6.5(知多)
〃 3	14	35.5		38		
〃 4	58	42				
嘉永元	61	11.6		27.5		
〃 2		35		37.4		

図2-5-22 早川家「地区別年代別仕入れ量の割合

	買った 塩俵の 総数	うち大 岡屋よ り買った 塩俵	塩 俵 相 場 (両二)	運 賃 (1俵ニ付)	小たちん (1俵ニ 付)	川 揚 (1俵ニ 付)	口 銭 (100俵ニ 付)	升 銭 (100俵ニ 付)	御 運 上 (100俵ニ 付)
嘉永4(1851)	1100	1100	19.5	16.6	4.3	5.4	11.0	2.0	9.0
6(1853)	1000	1000	25.5	16.6	4.34	4.4	6.97	2.0	9.45
安政3(1856)	1259	1150	24.0	16.6	4.24	4.39	8.41	2.43	9.5
文久2(1862)	1852	1500	19.0	16.53	3.94	4.48	12.59	2.0	9.45
3(1863)	1360	1360	13.0	16.92	4.66	4.65	17.22	2.0	9.12
元治元(1864)	1000	1000	8.0	19.83	4.99	4.58	85.0	2.0	9.4
慶応元(1865)	725	725	8.0	24.98	5.25	5.33	24.65	2.0	9.52
2(1866)	750	750	6.5	33.33	6.66	6.89	35.4	2.0	9.0
3(1867)	850	850	9.5	67.36	14.60	10.51	22.0	1.82	9.45
明治元(1868)	685	685	6.5	88.00	15.34	16.39	26.94	3.0	9.44
2(1869)	593	593	3.2	102.35			74.74	3.0	
3(1870)	950	950	4.3	124.72	14.59		48.17	3.0	
4(1871)	1220	1220	5.0	137.60	16.76		38.86	3.0	
5(1872)	690	500	9.2		14.61		16.16	3.0	
6(1878)	936	880	8.5		14.00		22.47	3.0	

図2-5-23 早川家「塩買帳」の整理表

⁸ 岡崎城の外堀にあった信濃門を起点に足助に通じる街道。延長が7里(約28キロメートル)あることから、別名「七里街道」とも呼ばれる。

③八丁味噌の醸造

江戸時代から続く伝統製法を守り継ぎ、原料は大豆と塩のみである。まず蒸した大豆に麹^{こうじ}カビをつけて豆麹にし、この豆麹に塩と水を加えて、100年以上使用しているものもある大きな杉桶に仕込んでいく。そして職人の手により天然の川石を山のように一つ一つ積み上げて重石とし、当地の自然環境に任せ、こだわりの天然醸造で二夏二冬の間じっくりと熟成させる。この重石を木桶全体に均等に圧力が加わるように、かつ地震があっても崩れないようにする熟練の域に達するには、少なくとも10年の経験が必要といわれている。

一般的な味噌は、コストを下げるため気温の低い季節でも味噌を加熱することで熟成を早める即醸法という方法をとるが、どうしても風味が単純となり四季の変化を経た天然醸造には及ばない。八丁味噌では二夏二冬の醸造期間の間、人の手は一切入らず、自然の摂理に従ってじっくり寝かせるため、大豆の旨みを逃さず、硬くて色が濃い、そして少々酸味と渋味がありながらも濃厚な旨みとコクのある独特の風味が特徴の八丁味噌ができる。



図2-5-24 石積み



図2-5-25 仕込み(踏み)

④八丁味噌の販売

大豆そのものを麴化し、塩と水だけを加えて熟成させる八丁味噌は、一般の味噌に比べて水分が少ないことから保存性が良く、携帯するのに便利であったため、戦国時代には三河武士の兵糧として重用されていた。その後、徳川家康公の関東移封を機に、三河譜代⁹の大名や旗本、そして参勤交代やお伊勢参りといった旧東海道を行き交う人々を通じて、広く全国に知られ、多くの人々に親しまれるようになった。

江戸時代以来、八町村の旧東海道を挟んで向かい合った早川家と大田家の2軒が製造販売する八丁味噌は特に有名となり、地元周辺のみならず江戸にも多く積み出され、その名を高からしめた。

両家の家伝によれば、味噌造りの始まりは戦国期又は室町時代初期まで遡るといわれるが、問屋として製造販売を行うようになったのは史料によると元禄期(1688～1704)頃からである。

早川家の「江戸当座帳」^{えどとうざちよう}ら販売先や販売量を整理してみると、販売先の問屋は、1年間で20軒程度で、そのうちの8～9軒は江戸であり、日本橋・大伝馬・麴町・牛込等の大店へ、伊勢では津・白子・松坂・四日市等の問屋を中心に販売されていることがわかる。



図2-5-26 旧東海道(八帖往還通り)

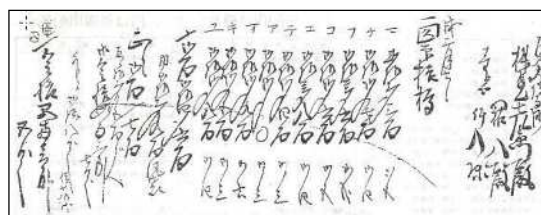


図2-5-27 早川家「江戸当座帳」の記載例

問屋名	文久2 (1862)	文久3 (1863)	元治元 (1864)	慶応元 (1865)	*慶応2 (1866)
江戸日本橋 伊勢屋吉之助	貫 6328.3 (45.2%)	貫 7418.8 (60.1%)	貫 7050.0 (64.8%)	貫 8192.3 (63.5%)	貫 2270.4(65.8%)
江戸 麴町 三河屋治郎八	947.4 (6.8%)	940.5 (7.6%)	393.3 (3.6%)	488.0 (3.8%)	155.8(4.5%)
江戸牛込津久戸 三河屋吉兵衛	294.3 (2.1%)	233.7 (1.9%)	252.1 (2.3%)	308.0 (2.4%)	114.4(3.3%)
江戸下谷稲荷町 三河屋茂八	984.2 (7.0%)	942.2 (7.6%)	392.1 (3.6%)	1002.6 (7.8%)	315.9(9.1%)
江戸牛込小日向 三河屋又兵衛	655.4 (4.7%)	405.0 (3.3%)	291.7 (2.7%)	345.6 (2.7%)	/
江戸大伝馬町 川喜田半七	580.5 (4.1%)	410.7 (3.3%)	576.7 (5.3%)	/	/
江戸大伝馬町 川喜田清助	397.1 (2.8%)	199.2 (1.6%)	194.0 (1.7%)	195.3 (1.5%)	/
江戸大伝馬町 栢屋七左衛門	396.4 (2.8%)	394.7 (3.2%)	198.1 (1.8%)	398.1 (3.1%)	/
伊勢 四日市 西村 長八	/	4.9	24.0	170.4 (1.3%)	/
伊勢 白子 川喜田藤兵衛	5.0	4.7	9.5	/	/
伊勢 白子 青木 佐七	/	4.4	/	4.8	/
伊勢 津 神納屋長三郎	5.0	358.9 (2.9%)	9.4	/	/
伊勢 松坂 小野屋伊右衛門	/	117.1 (1.0%)	6.0	56.1	358.7(10.4%)
長谷川和七・与七	411.3 (2.9%)	119.7 (1.0%)	388.8 (3.6%)	163.0 (1.3%)	/
長谷川文兵衛	118.1 (0.8%)	456.3 (3.7%)	681.3 (6.3%)	100.4 (0.8%)	/
平坂 外山(柳助・徳太郎)	205.6 (1.5%)	43.8	43.0	504.8 (3.9%)	43.5

図2-5-28 早川家「江戸当座帳」の年代別・問屋別の味噌販売量(*印は4月まで)

⁹ 家康公が三河に在城していた時代に服属した家臣のこと。

安政4年(1857)に江戸役人が書いた『三河^{みかわ}美やげ』という本の中には「八丁味噌」の記載があり、江戸時代以来、岡崎城下の名産として称賛されてきた。さらに安政2年(1855)頃^{だいじゅうじ}に大樹寺再建のため江戸から派遣された役人の記録には、「味噌八丁味噌とて名物也、百文は三百三十匁又三百五十匁目位也、八丁村に問屋二軒あり」とあるなど、幕末には八丁味噌の名はかなり広い範囲に知られていたことがうかがえる。そして「今日も亦雨かとひとりごちながら三河味噌あぶりて喰ふも」という斎藤茂吉¹⁰の短歌にも詠われた。

また、言うに及ばず、八丁味噌の生産地として地元でも多く販売され、古くから東海圏の食文化を支えてきた。岡崎城下及び岡崎領外への地元販売については「地廻^{じまわり}当座帳」に記載されており、その販売圏は岡崎城下や

その周辺を主として、知多・渥美・名古屋・美濃、そして信州伊那谷^{い なたに}までに及び、領内寺院や藩庁、旗本、役所、番所、茶屋役人など小口購入も多い。

味噌造りの伝統はその後も代々受け継がれ、カクキューでは明治25年(1892)に宮内省への納品が始まり、同34年(1901)には正式に御用達の栄に浴することになった。そして日清戦争での広島大本営への製品納入や病院、有名料理店、菓子屋での使用など販路が拡大し、第2次世界大戦後も八丁味噌の銘柄の声望は衰えず、マナスル¹¹登山隊や南極観測隊の携行食品に採用されるなど注目されてきた。

さらに現在では、両社とも味噌蔵等の工場見学を設けており、販売だけでなく伝統産業を実際に見て味わうことのできる貴重な場として今日まで多くの観光客を受け入れ、本市の観光振興においても欠かせない産業となっている。こうした味噌蔵等が集中する地域一帯は、歴史的な趣を残した味噌蔵の特徴的な景観と、地域にかすかに広がる八丁味噌の香りが合わさり、往時のまちなみの風情を感じさせる。

岡崎城下町と周辺の販売先
米屋市蔵(山中) 願照寺(舩越) 新助(町内) 法蔵寺(本宿) 緒方(城内) 早川(隣家) 定治郎(藤川) 綿屋(百々) 今井(百々) 八三郎(村入用) 足袋屋(本町) 長坂(細川) 平川(町内) 鶴屋(連尺) 羽田(両町) 御陣屋(本郷) 新美(西矢作) 手永会所(渡) 畔柳(連尺) 大嶋屋(連尺) 中野(城内代官所) 大樹寺(鴨田) 穀屋(久右エ門) 平野(中嶋) 本屋文七(連尺) 穀屋(投町) 服部(伝馬町) 紙屋(連尺) 垣内(御家中) 具津(百々) ④(六地蔵) 羽田(両町) 松応寺(能見) 広瀬(城内) 酒屋(祐金) 成瀬(連尺) 上様御勝手(城内) 茶屋役人(板屋) 御陣屋(西本郷) 植村(城内) 太田(北野) 中野屋(伝馬) 津嶋屋(能見) 貝津屋(百々) 御暗所(城内) 小村屋(上伝馬) 志賀(城内) 足立(中嶋) 古手屋(連尺) 奥村(城内) 御番所(伝馬) 玉泉寺(大友) 千賀(連尺) 林(城内) 御役所(城内) 深見藤十(新堀) 鈴木(伝馬) 回問院(鴨田) 中根(細川) 御宿(伊賀)
岡崎領外の販売先
福嶋屋(挙母) 材木屋(古風) 油屋七兵衛(新川) 小林屋(濃州) 豆腐屋(九久平) 宇野(平蔵) 溜屋(城ヶ入) 米屋(桑名) 新美(平坂) 西尾屋吉左エ門(挙母) 橋本屋(大須) 白木屋(挙母) 米屋(平坂) 中屋(越戸) 塩屋吉右エ門(大浜) 山形屋(越戸) 太田(川島) 万座(名古屋) 土方(七浜) 松平(赤坂) 問屋源之助(古風) 御陣屋(深溝) 機屋嘉右エ門(牛田) 畔柳親方(棚尾) 藤田(宮) 片山(鷲塚) 武右エ門(茶屋村) 尾張屋(知継餅) 市川(平坂) 佐藤(名古屋) 渡辺(濃州芝原) 吉嶋(名古屋) 野村(田原) 現金屋(岩村) 結梗屋(名古屋) 大和屋(名古屋) 渡辺(濃州・芝北方) 徳次郎(亀崎) 穂積屋(亀崎) 間瀬(亀崎) 白木屋(田原) 長谷川(岩村) 赤重(越戸) 代三郎(佐久嶋) 栗田(滝山) 八百屋(名古屋長者町) 油屋(挙母) 彦左エ門(平蔵) 麻屋(吉田) 伊助(浪合) 市古(伏見屋新田) 山川(江州) 関東屋(京都) 吉田(亀崎) 稲垣(中畑) 天野(京都) 海口屋(京都) 御宿喜太郎(伊賀) 田中屋(大坂) 加賀屋(大坂) 善永寺(京都) 万屋(津) 国冢(京都) 正観寺(京都) 米屋(桑名) 大和屋(名古屋・堀川) 渡船方会所(名古屋) 松居(伊勢)
地元問屋による江戸への販売
三上宗左エ門(江戸) 御山門(芝) 大納戸(江戸) 大和屋(日本橋) 浅見(江戸御屋敷) 三河屋(浅草) 小津渚左エ門(大伝馬) 関戸(元浜) 和泉屋(大伝馬) 堺屋(西久保) 木戸(江戸御屋敷) 内田屋(元浜) 宮部(下谷) 近江屋(新大坂町) 太田屋(深川) 田原屋(本材木)

図2-5-29 早川家「地廻当座帳」による地元の販売先(慶応2年(1866)) ※()内は販売先地名

¹⁰ 明治から昭和にかけての歌人、精神科医。

¹¹ ヒマラヤ山脈に属する標高世界8位のネパールの山。

月	日	江戸の間屋名	日	岡崎以西の間屋名	日	地元の販売先
1	17	大伝馬 万屋平三郎(4) 中屋 吉助(5) 長谷川丈助(3) 日本橋呉服町 伊勢屋吉之助(5)		名古屋玉屋 魁屋萬兵衛(1) 本町 こまや源兵衛<柳屋 磯七舟>		新堀 深見佐兵衛(2)
2	5	日本橋 伊勢屋吉之助(5) 白子屋紀兵衛(3)			1	中村 中基(1) <平古 清吉舟>
11	17	大伝馬 大和屋善吉(5) <大浜 長七舟>			5	味兵衛 普元寺(1)
24		日本橋 伊勢屋吉之助(5) <中畑 大吉舟>			5	平坂 外山六右エ門(1) <中畑 清吉舟>
		大伝馬 伊藤作兵衛(5) <中畑 仁平舟>				
3	4	伊藤和助 <六供 伊藤屋>	2	鳴海 山花文吉(3)	11	中村 中根基助(1) <平坂 金吾舟>
12		日本橋 伊勢吉(5) <大浜 長四郎舟>			19	中村 中根基助(1) <中畑 善吉舟>
21		白子屋仁兵衛(3) <中畑 善吉舟>				
31		水野和泉守屋敷丸尾(1) <中畑 勘藏舟>				
4	1	水野和泉守屋敷大石(4) <中畑 勘藏舟>	24	伝馬町1 鈴村庄兵衛(1)	16	平坂 石川小左エ門(1) <中畑 勘藏舟>
16		日本橋 伊勢屋(5) <柳屋 長四郎舟>			22	九久 伊 八(1) <平古 清吉舟>
18		〃 〃 (5) < 〃 >				
5	14	小畑町 伊勢屋伝右エ門(5) <中畑 友吉舟>	22	鳴海 山花文吉(2)	6	中村 中根基助(1) <中畑 要太郎舟>
22		水野和泉守屋敷大石(3) <中畑 友吉舟>				
		〃 上野(1) <中畑 仁平舟>				
		大伝馬 田端屋武兵衛(3) < 〃 >				
		日本橋 伊勢屋(3) < 〃 >				
6	9	日本橋 伊勢吉(5) <中畑 仁平舟>			1	中村 中根基助(1) <平古 清吉舟>
		白子屋仁兵衛(3) <中畑 仁平舟>			6	米屋幸四郎(3)
17		大伝馬 田端屋武兵衛(3)			6	土呂町 成瀬林右エ門(3)
					18	堀崎屋幸助(1)
7	26	日本橋 伊勢吉(5) <中畑 茂助舟>			12	中村 中根基助(1) <平古 清吉舟>
		大伝馬 田端屋(4) < 〃 >			26	中村 中根基助(1) <平坂 惣八舟>
		大 善(3) < 〃 >				
		伊勢八(3) < 〃 >				
8	16	水野和泉守屋敷松本(2) <中畑 七舟>	11	熱田 白子屋(3) 鳴海 山花文吉(1)		
9	20	日本橋 伊勢屋(4) <中畑 勘七舟>	3	名古屋 次郎左エ門(2) <堤 茂兵衛馬>	8	中村 中根基助(1) <平坂 惣八舟>
		白子屋仁兵衛(3) < 〃 >	20	大坂 大坂屋小三郎(5) <中畑 仁平舟>	9	新堀 深見佐兵衛(5) <中畑 仁平舟>
		大伝馬 紙屋七右エ門(3) < 〃 >	20	京都 岡田小八郎(5) < 〃 >		
10	5	大伝馬 長谷川丈助(3)	4	鳴海 兒玉代助(1) <六供 伊藤屋>	30	中村 中根基助(1) <平古 清吉舟>
		牛込 木村林彦(1) <中畑 又八舟>	9	名古屋 魁屋萬兵衛(1) <中畑 又八舟>		
20		日本橋 伊勢屋吉之助(5) <中畑 太郎吉エ門舟>	14	熱田 小沢屋市兵衛(2) <知立 源内馬>		
		白子屋仁兵衛(3) < 〃 >	14	魚問屋沢右エ門(2) <堤 新吉馬>		
		大伝馬 万屋平三郎(3) < 〃 >	19	桑谷 龍屋齋藏(1) <中畑 又七舟>		
		赤坂 諏訪半人屋敷(1) < 〃 >	20	鳴海 山花文吉(2) <知立 神七馬>		
11	8	日本橋 伊勢屋吉之助(16) <渡場 清七舟>	14	名古屋伝馬 山屋次右エ門(1) <中畑 又七舟>	7	中村 中根基助(1) <平坂 惣八舟>
19		八丁堀 山川百太郎(3) < 〃 >	15	〃 納屋 近江屋藤左エ門(1) < 〃 >	21	平坂 七福丸源六(注文6) <渡場 清七舟>
		水野和泉守屋敷大石(3) < 〃 >	13	大坂 堀屋佐右エ門(1) <渡場 清七舟>	24	中村 中根基助(1) <平古 基助舟>
26		日本橋 伊勢屋吉之助(5) <中畑 仁平舟>	13	京都 山崎屋弥助(1) < 〃 >	22	新堀 深見佐兵衛(7) <中畑 仁平舟>
		国 紀(3) < 〃 >	12	大坂 葉守屋新右エ門(2) < 〃 >	27	中村 中根基助(1) <平古 清吉舟>
		大伝馬 中屋吉助(5) < 〃 >	12	京都 小川徳右エ門(2) < 〃 >		
		大和屋善吉(2) < 〃 >	28	名古屋 堀崎屋幸助(1) <中畑 又七舟>		
		萬 平(3) < 〃 >		〃 岩田屋源兵衛(1) < 〃 >		
25		水野和泉守屋敷丸尾(6) <中畑 又八舟>				
12	10	日本橋 白子屋仁兵衛(3) <中畑 清九郎舟>	8	名古屋 駒屋源兵衛(2)	9	平坂 石川小左エ門(2) <中畑 久蔵舟>
		大伝馬 大和屋善吉(3) < 〃 >	5	伊勢津 平田新左エ門(1) <中畑 米蔵舟>	9	中村 中根基助(2) <平古 清吉舟>
		田端屋半兵衛(3) < 〃 >		〃 白子 駒村基九郎(1) < 〃 >		
		〃 半三郎(3) < 〃 >	21	名古屋 魁屋萬兵衛(1) <中畑 三郎兵衛舟>		
			22	熱田 小沢屋市兵衛(2) <知立 徳使馬>		

図2-5-30 早川家「注文覚」による問屋名(天保8年(1837)) ※()は樽数、< >は運送川船名

(4)おわりに

八丁味噌は、その名に「八丁」を冠するように、歴史あるこの地において、三河武士の資質・質実剛健をそのままに300年以上変わらぬ伝統製法を頑^{かたく}なに守り継ぎ、歴史的建造物の味噌蔵で時間をかけてじっくり醸造されてきた。また岡崎人にとっては日々の生活に浸透しているかけがえのない故郷の味であり、まちを歩くとほのかに漂う味噌の香りとともに、歴史に裏付けされた誇りある蔵造りのまちなみ景観が風情を漂わせている。八丁味噌にみる歴史的風致は、まさにこの土地の風土と歴史が育んだ伝統的地場産業の風致である。



図2-5-31 郷土食の八丁味噌造りにみる歴史的風致の範囲



郷土食としての八丁味噌

早川家の創業口伝によると、貞治元年(1362)矢作川右岸の舩越村^{へつし}の屋敷で自家用の豆味噌を製造したと伝え、大田家の口伝では、延元2年(1337)、八丁村で酒造りから味噌造りに移行したとある。この両家に共通しているのは、自家用の豆味噌を3年間放置したものを食べたところ風味がよかったので、兵食や庶民層の需要に応じ、醸造業に転移したと伝えている点である。

このことは、すでに室町時代には矢作川流域の農家では自家用の豆味噌を製造し、食していたことを物語るものといえる。矢作川流域は台地と自然堤防に恵まれ、古来より低地における稲作のほか、クワ・ワタ・ダイズ・ダイコン・イモ等が栽培されてきた。そして 1400 年前後より味噌・味噌汁として庶民の食膳にあがり、特に戦国時代には、兵食又は保存食品として重用され、需要の高まりとともに製法も工夫され、普及してきたと考えられる。

八丁味噌の特徴としては、耐保存性だけでなく、栄養価が高いことがあげられ(蛋白質・脂肪・カロリーなどは他の味噌の2倍)、特に人体必須アミノ酸・脂肪酸の含有特殊食品であることがわかっている。天保7年(1836)の『参河志』には、「三河国朝夕食汁に赤味噌を用ゆ、他国にはなし」^{しょうそ}「瘍疽(はれもの)・疔瘡(できもの)・瘰癧(るいれき)・癰瘡(しやくひ)の病人は稀なり、思ふに当国は朝夕赤味噌を用る故なるべし」と記されており、江戸時代には三河の地において味噌汁を始めとした赤味噌文化が毎日の食卓に欠かせない日常食として根付き、さらに他の味噌とは違った栄養価があることにすでに気づいていたことが読み取れる。そもそもこの八丁味噌の母体と考えられる豆味噌は、全国の中でも東海三県(愛知、岐阜、三重)で常食とされてきた。この地方の夏は高温多湿で酸敗が起こりやすかったため、米味噌や麦味噌よりも、高温に耐え、長期保存ができる豆味噌が個性的な伝統食品として定着したのである。この豆味噌は煮込んでも香りの変化が少なく、食材への香りの吸着と油の乳化性に優れ、特に肉や魚介類の旨みを相乗的に高めるとともに、その味を補強し、調和させるという優れた調理機能を持っている。これが東海地域に味噌料理の多い食文化をつくってきた。そのなかでも八丁味噌が天下に名声を博したのは、何といてもその香りと味の良さによる。長期熟成の寝かし味噌なので、生で食べても辛すぎず料理にしてものびが利き、その独特の風味が様々な料理を引き立てるとされる。また、「摺ってよし、摺らず猶よし、生でよし、煮れば極よし、焼いて又よし」といわれる八丁味噌は、料理用途が広く、艶のある濃い赤褐色の色沢は田楽のたれに最適であり、焼き味噌にも煮味噌にも合い、味噌汁でもよく食される。

この西三河地方に伝わる冬の農家の郷土料理「煮味噌」は、人参・葱等の野菜と油揚げ・蒟蒻等を自家製豆味噌(赤味噌)でじっくり煮込んだ鍋料理で、現在でも各家庭の味付けがあり、冬の家庭料理の代表のため、他の味噌料理と違って料理店で供されることがないのが特徴である。

このように、古くから三河武士を始め、農民、町人たちに親しまれ、今日まで様々な料理で日々の食卓を彩ってきた八丁味噌は、市民にとってはなくてはならない郷土の味となっている。まさに風土に培われ、庶民の嗜好性^{しこう}に支えられて成立した代表的な伝統食品である。

そして、近年では、八丁味噌に含まれる塩分量が他の味噌に比べて少ないことなどもあり、健康食としてますます評判を高め、その人気は国内だけでなく、世界 20 カ国以上にわたり、無添加の自然食品として特にヨーロッパ等で注目されている。



日吉丸と蜂須賀小六の出会い

後に豊臣秀吉となる日吉丸は8歳の頃に奉公に出されたが、12歳のとき奉公先の陶器屋を逃げ出し、家へ帰るわけにもゆかず、東海道を東へ下る途中、疲れて矢作橋の上で寝ていた。そこへ野武士の頭だった後の蜂須賀小六が現れ、日吉丸の頭を蹴った。日吉丸は「詫びていけ」と言って小六を睨みつけたが、小六は、子供にしては度胸があると思い「手下にするから初手柄をみせよ」と言うと、日吉丸は同意し、橋の東にある味噌屋の門近くの柿の木に登り、屋敷の中に入って門を開け、小六らを引き入れた。目的を達して逃げようとしたとき、家人が騒ぎ始めたので、日吉丸は咄嗟に石を井戸に投げ込み、「盗賊は井戸に落ちた」と叫びながら、家人が走り集まる隙に素早く門を抜け出たという。まるやの敷地には、その伝説にちなんだ井戸が今も残っており、矢作橋のたもとには2人が出会った様子を再現した「出合之像」が建てられ、乱世の時代劇を垣間見る逸話となっている。【参考：絵本太閤記(寛政9年(1797))】



図2-5-32 出合之像



図2-5-33 まるやの井戸

2-6.六ツ美地区の稲作儀礼にみる歴史的風致

(1)はじめに

六ツ美地区は本市の南西端に位置し、原始より矢作川の氾濫原にあたり、肥沃な土地に人々の生産基盤が依拠してきた。人々の住居は洪水により形成された自然堤防上に立地し、生産基盤は沖積低地を利用した水田や畑であり、平野部の田園風景の中に集落が点在する地域である。古くから農業が盛んな地区であり、現在も受け継がれている御田扇祭りや六ツ美悠紀斎田お田植え祭りなど、この地域特有の稲作儀礼をみることができる。

表2-6-1 小風致の概要

小風致	建造物	活動
御田扇祭りにみる歴史的風致	犬頭神社 他	御田扇祭り
六ツ美悠紀斎田お田植え祭りにみる歴史的風致	悠紀斎田跡碑	六ツ美悠紀斎田お田植え祭り

(2)御田扇祭りにみる歴史的風致

①はじめに

御田扇祭りは、7月の日曜日に行われる五穀豊穡を願う祭礼である。神輿を中心に幟や紅白の扇、花傘を持った人々の渡御行列が、稲の繁る田園地帯を巡行する。近世岡崎藩の農民支配制度である手永制度のもと、藩領の6つの手永全てで行われていたが、現在も継承しているのは堤通手永20町と山方手永13町のみで、1年に1町ずつ神輿を渡御する。形態を変えつつも江戸時代から現在まで受け継がれている貴重な稲作儀礼である。

②建造物

御田扇祭りの起点となる神社は町により異なるため、堤通手永を構成する1町である宮地町の起点である犬頭神社を取り上げる。

A.犬頭神社

犬頭神社は大宝元年(701)、彦火火出見尊を祀って建立されたもので、上和田城主宇都宮泰藤¹が貞和2年(1346)に犬のおかげで災難を逃れ、その犬の頭を祀ったという伝承がある。以前は



図2-6-1 犬頭神社

¹ 宇都宮泰藤(1302～1352年)は下野国宇都宮氏の末裔で、三河大久保氏の始祖とされる人物。南北朝時代に碧海郡上和田の妙国寺前に移り住んだ。孫泰道は宇津氏と改姓し、さらに泰道の5代孫の忠俊・忠員兄弟の時に大久保氏となったといわれる。

隣接する上和田町の糟目にあったため糟目神社といわれていたが、たびたびの洪水により今の場所に移された。現在の本殿は明治 22 年(1889)に、拝殿は明治 34 年(1901)に再建されたものである。

神社には、越前福井(現在の福井市)産の凝灰岩(笏谷石)を原石とした鳥居、狛犬一対、唐猫一対等の石造がある。石鳥居は、総高 320.5 センチメートル、柱間 255.0 センチメートル、向かって左側の柱の銘文より、慶長 10 年(1605)に建立されたことがわかる。岡崎地方最古の石鳥居であり、越前鳥居としても最古の形式のもので、市指定有形文化財である。



図2-6-2 犬頭神社石鳥居

③活動

ア.御田扇祭り

a.御田扇祭りの歴史

御田扇祭りは、正式には「皇大神宮御田扇祭」といい、地元の人々からは「おうぎさん」「たおうぎまつり」と親しみを込めて呼ばれている。

御田扇祭りは、近世岡崎藩の農民支配制度である手永制度²のもと、藩領である手永内で行われた五穀豊穡を祈る祭りである。宝暦 6 年(1756)の『諸色覚書』によれば、同年にはその存在が認められるが、当時は手永から手永へと御田扇が巡行する形態であった。明和 6 年(1769)に本多忠肅が藩主となると手永は 6 つに区分される。本多氏時代には大庄屋の居村を発着地として各手永内において巡村が完結する形をとっていた。各手永内での巡行は旧暦 6 月に 20 日間前後かけて行われていたことが史料からわかる。

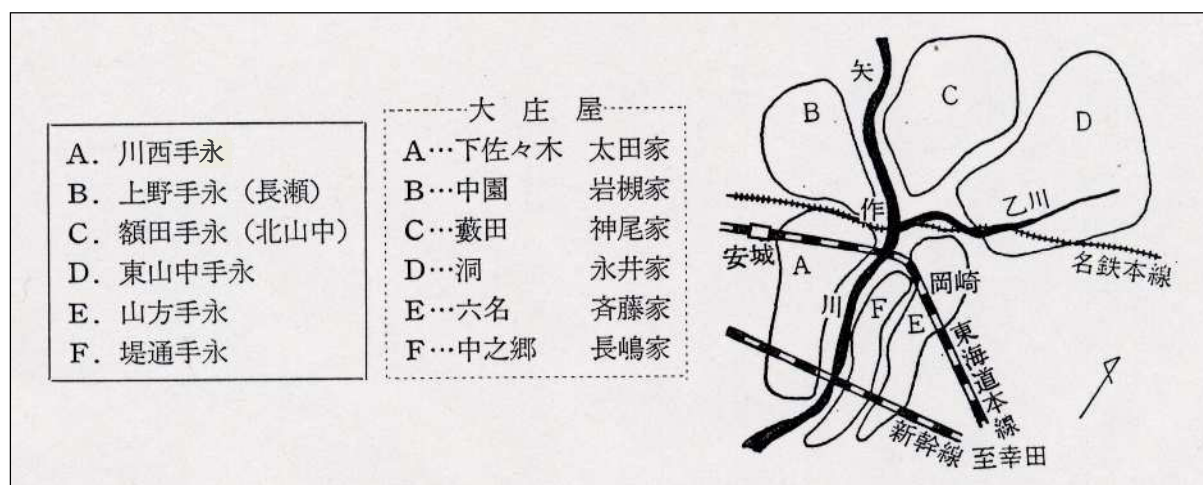


図2-6-3 6手永範囲と大庄屋

² 手永制度は大庄屋制度ともいわれ、水野忠善が岡崎藩主に就任した正保 2 年(1645)に成立したとされる。寛文 4 年(1664)時点で 9 手永に区分され、それぞれに大庄屋が置かれていた。大庄屋に各手永内の村々を支配させた制度であり、全国的にも導入した藩は希少である。

後本多家藩主時代には、御田扇祭りの開始(出発)時期の指示が岡崎藩から出され、6手永で一斉に開始されている。また、文化14年(1817)に伊勢神宮^{はらいふだ}祓札の受取を大庄屋に命じる史料があり、天明元年(1781)に岡崎藩が伊勢御師の山本大夫と春木大夫の兩人に扶助し、家中扱いとしている事実を勘案すると、御田扇祭りと伊勢信仰が藩主導の下に結び付けられたものと想定される。



図2-6-4 額田手永の扇



図2-6-5 額田手永の大麻(春木大夫銘)

実際に額田手永の神輿の中から春木大夫銘の大麻が発見され、伊勢信仰と御田扇祭りの関わりを示す資料として注目される。神輿内には現在、伊勢神宮外宮の豊受大神宮の御神札が納められているが、かつて額田手永^{やまがた}や山方手永では扇が、川西手永では扇と鉾形^{くわがた}が納められていたことが確認されている。

このように、御田扇祭りは岡崎藩の農民支配制度のなかで、虫送りや伊勢御師の廻壇配札行為と結びつき、行われてきた民俗行事と考えられる。岡崎藩の施策と密接に関わる御田扇祭りの存在は歴史的にも重要であり、他に類をみない民俗行事である点も大きな特色である。

b.現在の御田扇祭り

かつては岡崎藩の6手永全てで行われていたが、現在も神輿渡御を継承しているのは堤通手永^{つつみどおり}、山方手永の2手永のみである。堤通手永は20町(うち4町は西尾市)、山方手永は13町(うち1町は額田郡幸田町)で構成している。

後本多家藩主時代には旧暦6月に約20日前後かけて手永内の村々を神輿巡行していたが、明治期になってからは、1年に1町ずつ神輿を渡御行列により巡行する形態へと変化し、現在にいたる。堤通・山方手永とも田植えが終わった7月に1日かけてマチ³からマチへと移動する。

表2-6-2 御田扇祭り関係神社一覧

堤通手永			山方手永		
1	中之郷	中之郷神社	1	井内	八幡宮
2	上青野	櫛宮神明宮	2	下和田	犬尾神社
3	高橋	神明社	3	国正	稻荷社
4	上合飲木	神明社	4	正名	占部川神社
5	下合飲木	神明社	5	永野	永野神社
6	高落	神明社	6	定国	素盞鳴神社
7	新村	神明社	7	中村	占部天神社
8	西浅井	白山神社	8	坂左右	神明社
9	東浅井	社宮司社	9	野畑	鉾神社
10	安藤	鉾神社	10	若松	春日神社
11	福桶	三宮神社	11	針崎	御鉾神社
12	下三ツ木	三社神明社	12	柱	綿積神社
13	上三ツ木	神明社	13	羽根	稻荷神社
14	下青野	櫛宮神明社			
15	在家	神明社			
16	土井	社宮司社			
17	牧御堂	薬師堂			
18	法性寺	五社神明宮			
19	宮地	犬頭神社			
20	赤浜	御鉾神社			

³ 民俗学においては、行政的な「村」「町」と区別するために、祭礼組織や近世の自治組織としてのコミュニティなどを指す際に、カタカナで「ムラ」「マチ」と表記することが多い。

c.堤通手永御田扇祭り

御田扇祭りの行列の出発・到着は各町の神社となる。祭りは7月20日前後の日曜日に行われている。神輿などを送る側の町の神社で神事を執り行うことから始まり、その後渡御行列が発する。各町の女性部や子供会も参加し、町の規模によっても異なるが、行列は300人を超えることもある。行列の最中には藩、町、人が繁栄するように願う祝歌が歌われる。青々とした稲の繁る田園地帯を幟や紅白の扇、花傘を持った人々が練り歩く様には、その年の豊作を願う人々の思いが表れている。送る側と迎える側の町境で受け渡し式を行い、行列は迎える側の町の神社へ向けて出発し、到着後に神事が行われる。地元の小中学生による浦安の舞、女性たちによる奉納踊りなどが奉納され、祭りは神社内でも大きな賑わいをみせる。



図2-6-6 堤通手永御田扇祭りの渡御行列風景
(平成24年(2012) 中之郷町から上青野町)

手永内の順村は、旧暦の6月に約20日間前後で一巡するものであった。この形式は江戸時代末期まで続き、明治期に入って手永制度が終焉を告げても、祭りは6手永の中で存続していた。時代の流れに合わせて、次第に形態を変えてはいるが、先のとおり現在は2手永において存続している。(堤通手永御田扇祭及び山方手永御田扇祭りは、市指定無形民俗文化財)

④まとめ

御田扇祭りは、形態を変えつつも現在まで受け継がれている貴重な祭礼である。山並みを背景に、地形に起伏のない田園地帯に大屋根の社寺とその社叢が点在し、またそれら社寺を中心に集落が形成され、それを街道が結ぶ。五穀豊穰を願い、青々と広がる田園地帯のマチからマチへと神輿を中心とした渡御行列が巡行する姿は、岡崎市ならではの稲作儀礼の風情が感じられる。

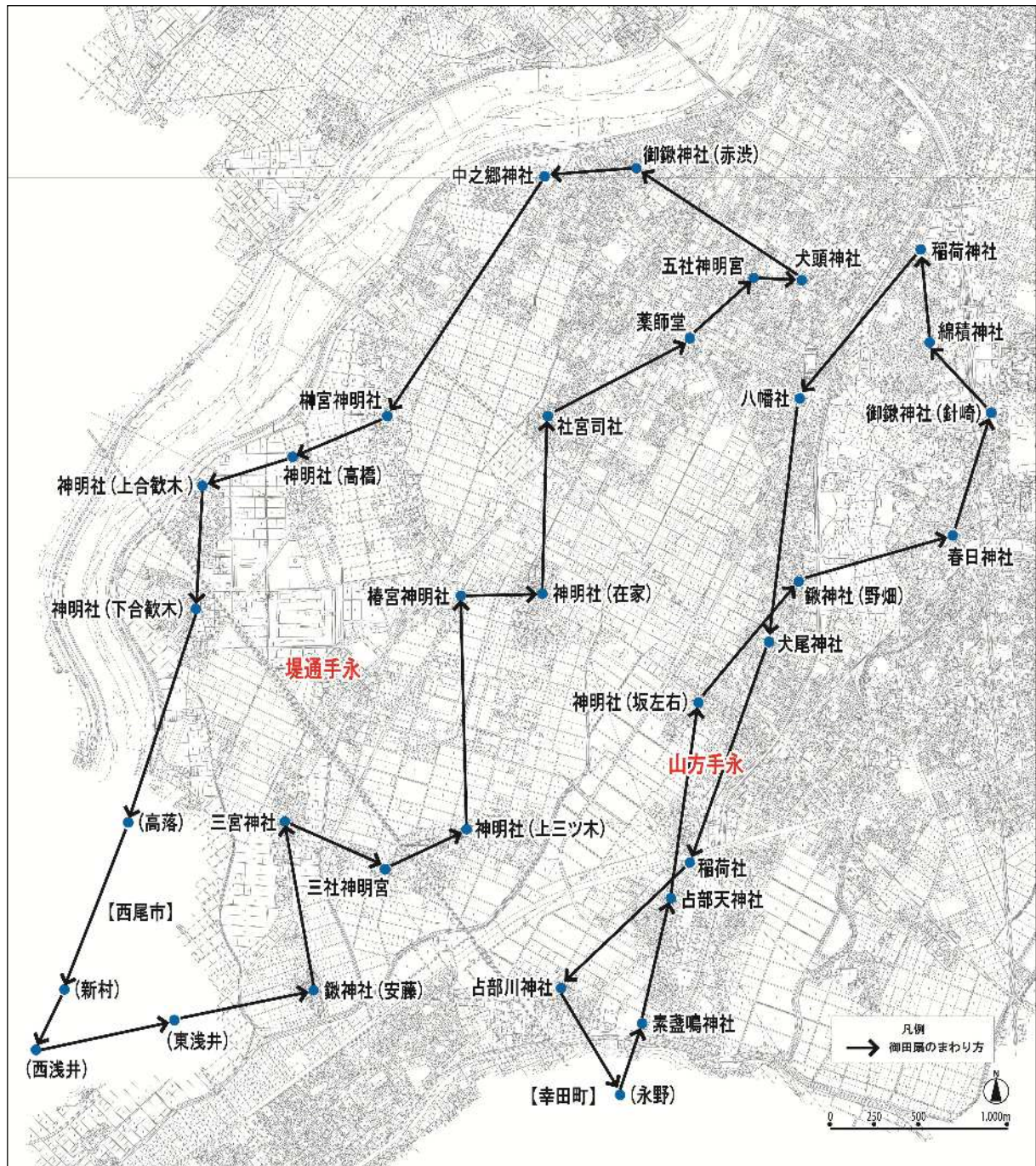


図2-6-7 御田扇祭りの巡回ルート(堤通手永・山方手永)

(3)六ツ美悠紀斎田お田植え祭りにみる歴史的風致

①はじめに

六ツ美悠紀斎田お田植え祭りは、6月第1日曜日に行われ、斎田で田植唄を歌いながら踊り、昔ながらの装束・農具を使って苗を植え、その年の豊作を祈る祭りである。大正期より続く祭りを継承することにより、稲作文化の伝承や地域の交流・活性化を図っている。

②建造物

ア.悠紀斎田跡碑

大正4年(1915)、大正天皇即位の大嘗祭⁴を行う際の新米をつくる斎田として、岡崎市中島町(旧碧海郡六ツ美村大字下中島字上丸ノ内)の4反歩(約3,960 m²)が選ばれた。

悠紀斎田の選定は、大正天皇即位後の大正3年(1914)2月5日、宮中三殿⁵で行われた亀卜⁶により、悠紀の地が愛知県と定められた。このことを受け、愛知県が適地の調査を進めて挙が



図2-6-8 現在の悠紀斎田

った候補地11箇所から、最終的に西春日井郡北里村大字小針(現在の小牧市)、中島郡稲沢町大字稲沢(現在の稲沢市)、碧海郡六ツ美村大字下中島(現在の岡崎市)の3か所に絞った。この3か所に対し、宮内省と農商務省が、同年3月6日、岡崎市の早川定之助氏が所有する土地を悠紀斎田の地として決定した。「悠紀斎田跡碑」は、銘文によると大正5年(1916)3月に建立され、この地が悠紀斎田に選ばれ、稲を供納した経緯が記されている。なお、現在の悠紀斎田の場所は、平成18年(2006)の都市計画道路の建設に伴い、移転した場所である。

③活動

ア.六ツ美悠紀斎田お田植え祭り

a.六ツ美悠紀斎田お田植え祭りの歴史

大嘗祭は天皇が即位後、初めて行う特別な新嘗祭⁴で、新穀をもって皇祖と神々を悠紀・主基⁵の両田に迎え、収穫祝いと今後の豊作を祈願する宮中の儀式である。京都を中心に東日本を「悠紀の地」、西日本を「主基の地」と称し、大嘗祭に供える米を作る田を斎田という。大正4年(1915)の大正天皇即位の大嘗祭では、悠紀斎田に岡崎市中島町(旧碧海郡六ツ美村大字下中島字上丸ノ内)の4反歩、主基斎田に香川県綾歌郡綾川町(旧綾歌郡山田村)の4反⁶4畝が選ばれた。斎田地として選ばれた背景には、高橋用水などの用排水路が整備されていたこと、

⁴ 天皇が皇位継承に際して行う最初の特設新嘗祭(宮中祭祀)。

⁵ 皇居の吹上御苑にある賢所、皇霊殿、神殿の総称。

⁶ カメの甲羅を使う占いの一種。カメの甲羅に熱を加えて、生じたヒビの形状を見て占う。

愛知県内では最初の耕地整理事業であり、全国的に見ても先駆的なものであった中島地区の耕地整理が完了していたこと、鉄道駅が整備されていて交通の便がよかったことが理由としてあったといわれている。

中島の地が大嘗祭悠紀斎田に決定されると、八幡社社務所が大嘗祭悠紀斎田新穀奉納事務所となり、境内には農具小屋・清斎所^{せいさいしよ}・井戸・休憩所・精米所などが建てられた。境内中央北側には悠紀斎田のときに使われた農作業道具を入れた収納庫が今も残されている。奉耕者は西三河全体から集められ、奉耕者が記した大正4年(1915)『大嘗祭悠紀奉耕記念記録』には、奉耕者に選ばれ、稲を栽培し、10月16日に御



図2-6-9 大正宮

所に供納するまでの日々の作業内容や、奉耕者として参加した思いや喜びなどが詳細に記されている。悠紀斎田に定められたことは、六ツ美村だけでなく、愛知県全体にとって名誉なこととされた。また、八幡社社殿の北側には昭和8年(1933)12月に建てられた大正宮がある。この社には大正天皇が祀られており、以前はお田植え祭りの神事が行われ、お田植踊りが奉納されていた。

大嘗祭に新米を供納^{きょうのう}した後も、これを記念して毎年6月第1日曜日に悠紀斎田お田植え祭りとして、長年にわたり保存・継承されている。

b.現在の六ツ美悠紀斎田お田植え祭り

大嘗祭の終了後も、斎田奉耕者やその子孫、村民有志等によって斎田地は保存され、田植唄を歌いながら踊り、昔ながらの装束・農具を使って苗を植え、その年の豊作を祈願する「お田植え祭り」として続けられている。六ツ美村青年会など地元の関係者を中心に続けられ、昭和41年(1966)には市指定無形民俗文化財に指定された。昭和47年(1972)には、六ツ美地区の住民により「六ツ美悠紀斎田保存会」が設立され、それまでの活動を引き継ぎ、現在まで継承されている。

現在は、悠紀斎田の古跡地に六ツ美地域の歴史や文化財などを紹介する六ツ美歴史民俗資料室を核とし、六ツ美地域の歴史・文化の保存と伝承、地域交流の拠点となる地域交流センター六ツ美分館「悠紀の里」が整備され、



図2-6-10 お田植えの風景



図2-6-11 お田植踊り

平成 26 年(2014) 2 月に全面開館した。斎田は悠紀の里の悠紀斎田広場に移設された。

お田植え祭りの当日は、事前の祈願祭が八幡社で行われる。斎田広場では午後 2 時から神事が執り行われ、神官により五穀豊穡などを祈願する内容の祝詞が読まれ、参列者による玉串奉奠^{たまぐしほうてん}が行われる。祭りは式典の後、お田植唄に合わせて地元の女性や小学校女子児童によるお田植踊りが披露される。お田植唄の拍子に合わせて斎田周辺を早乙女^{さおとめ}が踊りながら練り歩き、実際に苗が植えられていく風景は、大正期から受け継がれてきたものである。平成 27 年(2015)には悠紀斎田 100 周年を迎え、記念式典が秋篠宮 同妃両殿下^{あきしののみや どうひりょうでん か}の御臨席のもと盛大に開催された。100 周年記念事業を開催するにあたっては、平成 24 年(2012)に地元で実行委員会を立ち上げ、六ツ美地区が一体となって準備を行った。

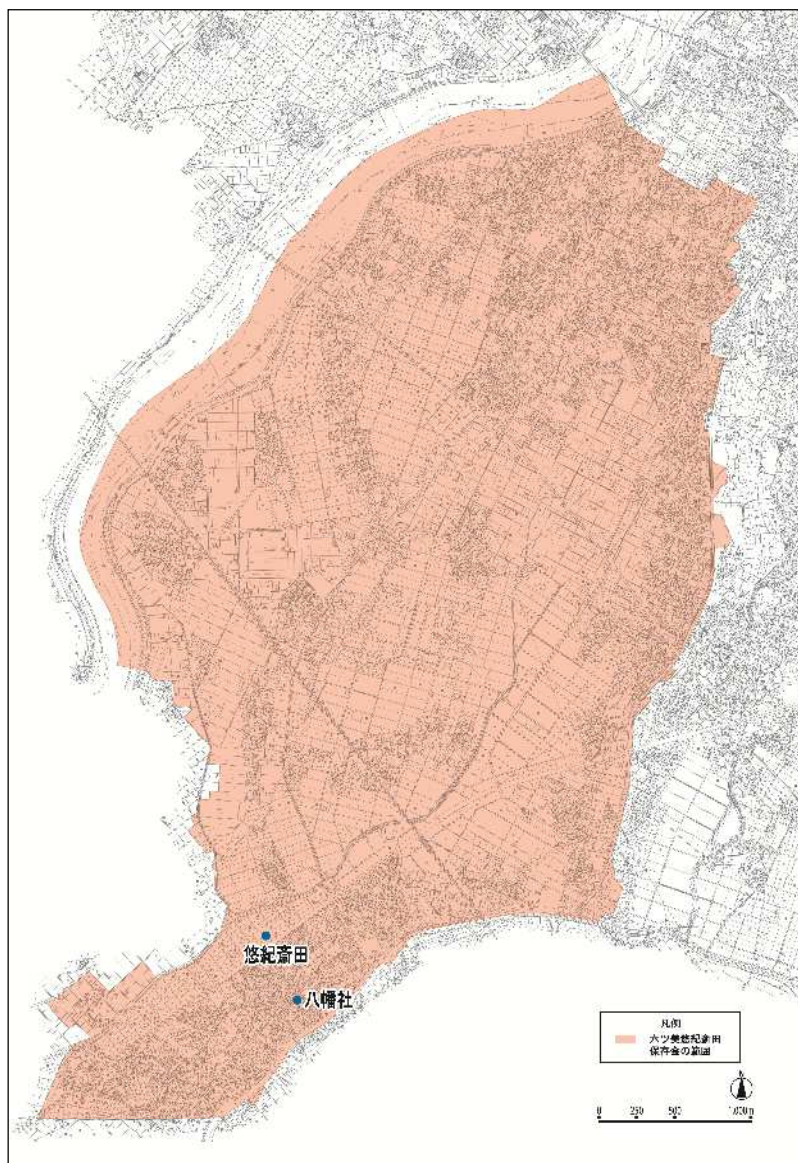


図2-6-12 六ツ美悠紀斎田保存会の範囲

④まとめ

六ツ美地区は田園風景の中に集落が点在する地域であり、古くから農業が盛んな地区である。お田植え祭りを長年にわたり保存・継承することにより、稲作文化の伝承や地域の交流・活性化を図ってきた。その地域特有の歴史や文化を伝えていこうとする取組みがみられ、地域に根差したコミュニティ活動の姿が感じられる。

(4)おわりに

このように、六ツ美地区は近世以降、県内でも先進的な農業地域としての歴史をもつ。また、近世には岡崎藩の農民支配体制の施策と相まって御田扇祭りという独特の民俗事例も生まれるなど、農耕儀礼に関わる民俗事象が色濃く残る背景には、現代まで農業を主たる生産基盤として発展してきたことがあげられる。

祭りを受け継ぐことを通じて、地域がまとまりをもち、さらには活性化へとつなげていこうとする団結力を感じることができる。稲作儀礼の伝承に地域をあげて取り組み、六ツ美地区特有の歴史・文化を次の世代に伝えていこうと努力している姿は、地域に根差した新しいコミュニティ作りの姿でもある。市街地では宅地化が進み、従前よりも田畑は減少しているが、田園地帯に社寺が点在し、その周辺に集落が形成されている風景は、農作業や祭りをを行う人々の営みが調和する、岡崎市ならではの歴史的風致を形成している。

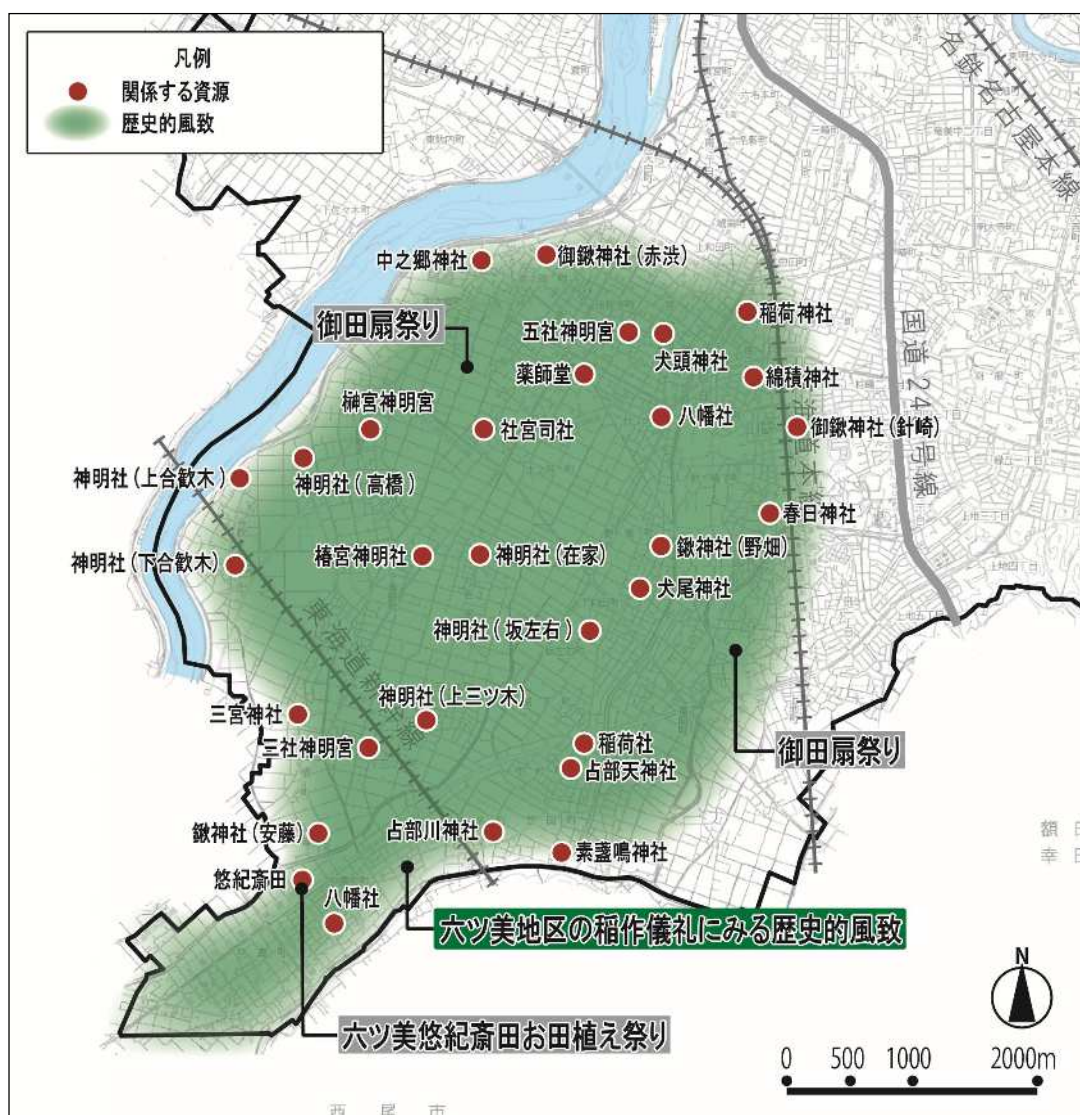


図2-6-13 六ツ美地区の稲作儀礼にみる歴史的風致の範囲



用水開発

六ツ美地区は矢作川の氾濫原にあたり、近世以降も頻繁に氾濫に見舞われ、人々の暮らしは古来、矢作川の氾濫との戦いであった。矢作川の氾濫は洪水被害をもたらした一方で、上流部から養分を含む堆積物を運び込み、これが六ツ美地区の肥沃な土地を形成した。とはいえ、耕地への導水は課題でもあった。

① 占部用水

占部用水は慶長 8 年(1603)に竣工し、矢作川流域で初めて開削された用水とされている。その後も改修されながら現在まで使用され、六ツ美地区 20 町地内を灌漑する用水である。現在の用水の大部分は埋管され、直接見ることはできない。

慶長期(1596-1615)の占部用水開削の功労者である野本新十郎と渡辺弥蔵は占部川神社に用水の守護神として祀られ、神社では毎年6月 16 日に「水恩忌」として祭りがおこなわれている。また、明治 18 年(1885)には2人の偉業を後世に伝えるため、「占部用水の碑」が思案橋のたもとに建てられた(昭和 27 年(1952)に占部川神社に移転)。

② 高橋用水

高橋用水は明治初期に着手し、昭和 33 年(1958)に完成した。高橋町地内を水源とし、六ツ美地区 13 町内を経て西尾市にいたる。高橋用水は大正4年(1915)の大嘗祭悠紀齋田に用水を供給した。



図2-6-14 用水配置図



耕地整理

六ツ美地区で最初に耕地整理に着手したのは中島地区で、明治 33 年(1900)に耕地整理法が施行された直後に耕地整理事業に着手し、明治 37 年(1904)に完成した。中島地区の耕地整理は全国的にみても先駆的なもので、愛知県内では最初の耕地整理事業であった。この後、明治 39 年(1906)から上合飲木、下合飲木、高橋、下青野、福桶、安藤、高落等の地区で連合整理が行われ、明治 42 年(1909)に竣工した。大正元年(1912)からは高橋、赤渋、中之郷の連合整理が行われ、大正4年(1915)に竣工した。耕地整理や先にあげた用水整備により、六ツ美地区の収穫高は向上した。

また耕地整理により湿田から乾田となったことで二毛作が可能となり、昭和初期には菜種栽培で全国1位の生産量を誇るまでにいたった。当時、羽角山から見渡すと六ツ美地区は黄色い絨毯(菜の花)で一面が埋め尽くされていたといわれるほど菜種栽培が盛んに行われていた。当時を記憶する人々には菜種の花が咲くときには養蜂家が蜜蜂を運んできて「はちみつ」の採集をするなど、はちみつの香りただよう美しい豊かな農村であったと懐古される。

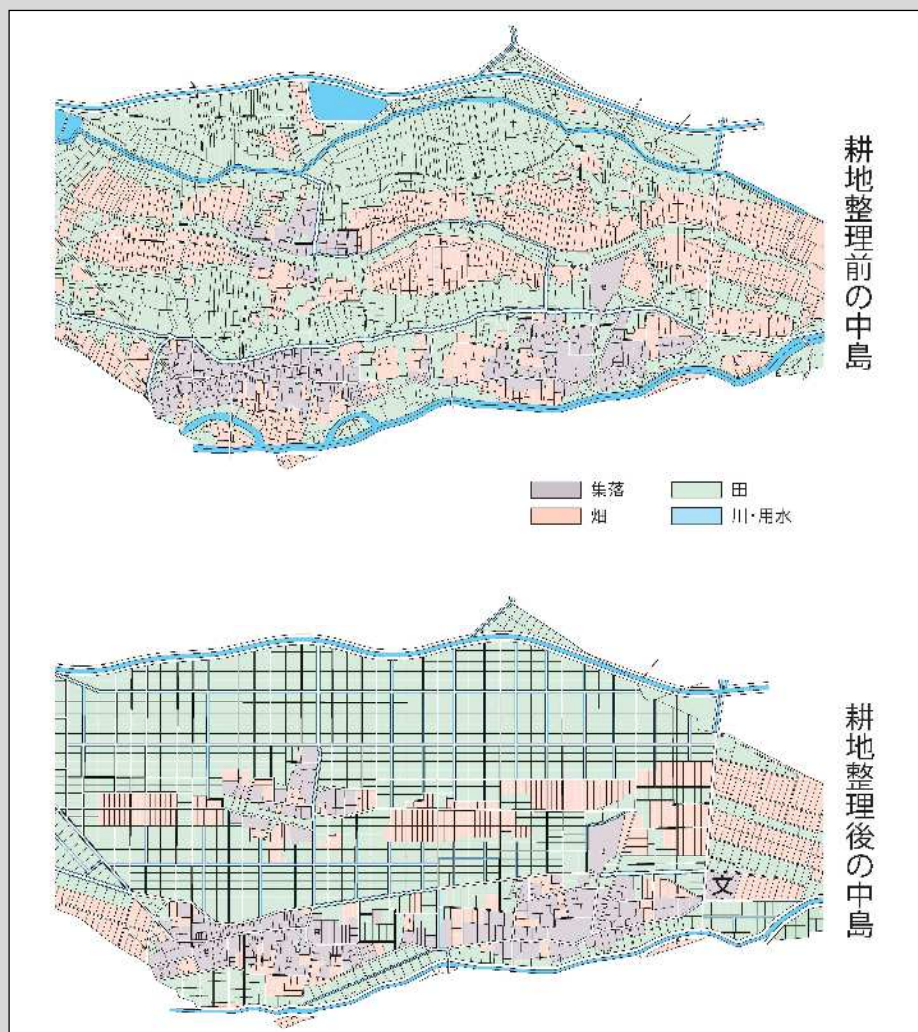


図2-6-15 中島地区耕地整理前後の状況

2-7. 額田地区の山里のくらしにみる歴史的風致

(1) はじめに

市東部の額田地区は、三河高原の西端に位置している。額田東部には標高 400 メートルから 600 メートルの山々が連なっており、最東部には本市最高峰の本宮山が位置している。これらの山々は、豊川市との市境を形成し、西三河と東三河の境界となっている。額田地区はその 98 パーセントが山地であり、南部の男川と北部を流れる乙川が作る溪谷沿いの平地に大小の集落が点在する。

北部の乙川水系は花崗岩帯で、谷底が浅く広く発達した地形であるため耕地が比較的得やすい。古く旧石器時代の西牧野遺跡や縄文時代の牧平遺跡などの遺跡が形成されてきた。南部の男川水系では領家変成岩類の広がる急峻な山と V 字谷が多くみられ、山の斜面が棚田として利用されてきた。鎌倉時代から室町時代の中頃までは足利氏とその一族の勢力が入り、戦国時代には日近城(桜形町)を拠点とした奥平氏が溪谷ごとに奥平庶家を配置し、一帯を支配した。江戸時代には約 50 か村に分かれ、幕府領、岡崎藩や鳥羽藩、西大平藩等の大名領、戸田家や巨勢家等の旗本領、天恩寺等の寺社領が入り組み、領主も入れ替わった。額田地区では、このような自然条件の違いに適応しながら、独自に営まれてきた人々の暮らしと民俗事例をみることができる。

表2-7-1 小風致の概要

小風致	建造物	活動
千万町の神楽にみる歴史的風致	八劔神社	千万町の神楽
須賀神社の祭礼山車と祭りばやしにみる歴史的風致	須賀神社	須賀神社の祭礼山車と祭りばやし
夏山八幡宮の火祭りにみる歴史的風致	夏山八幡宮	夏山八幡宮の火祭り
額田地区の当屋祭祀にみる歴史的風致	宮崎神社 石座神社	宮崎神社「オトウの神事」(オトウダイコン) 石座神社「神迎え神事」(アマザケトウ)
大代町と雨山町のコト八日行事にみる歴史的風致	正泉寺 菩提寺	大代町のコト八日行事 雨山町のコト八日行事
額田地区の猪垣にみる歴史的風致	万足平の猪垣	万足平の猪垣の石積み

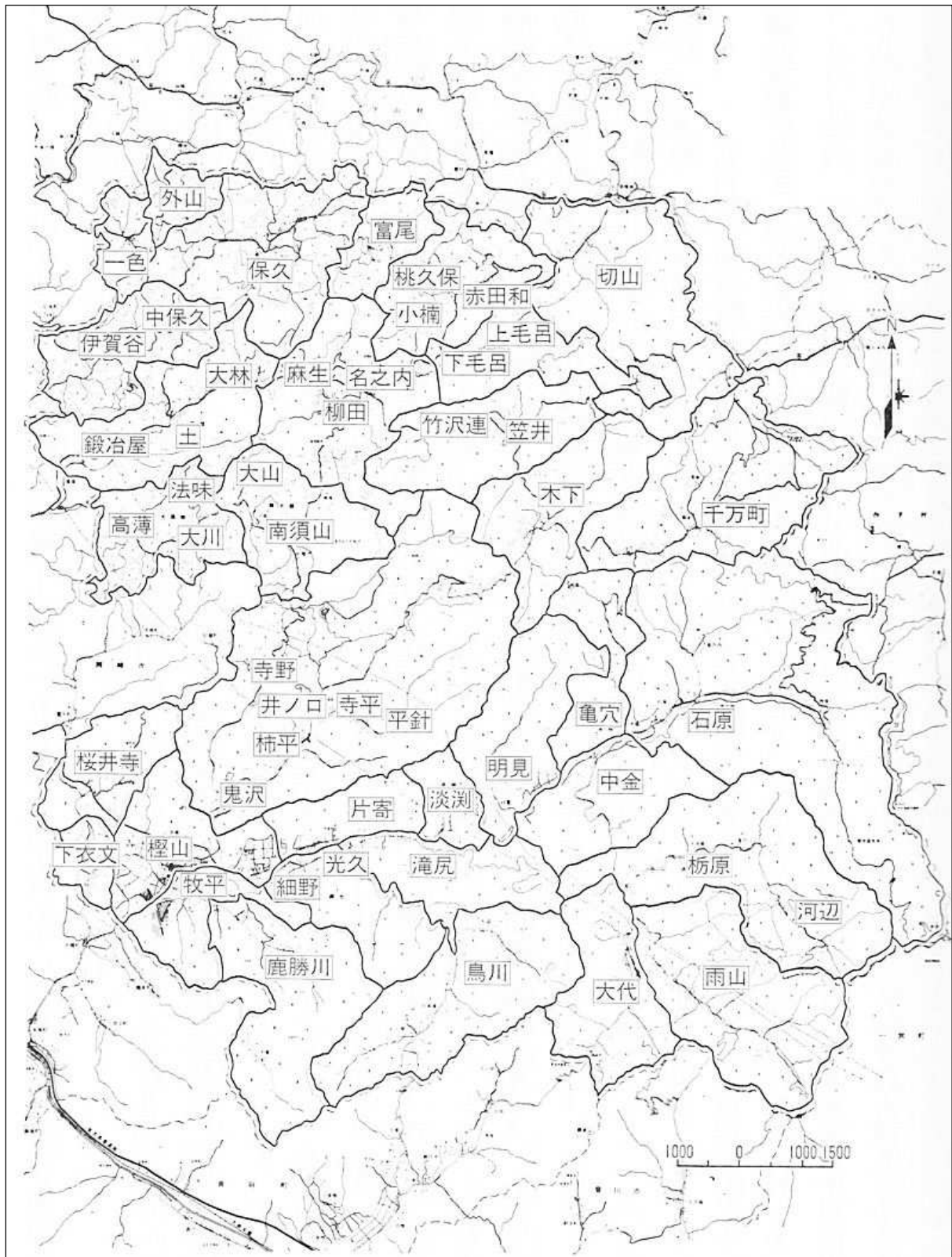


図2-7-1 近世の額田の村々（現在も村名の多くが町名や字名に残っている。）

(2) 千万町の神楽にみる歴史的風致

①はじめに

千万町^{ぜ まんちよう}の神楽は、山あいにある八劔^{や つるぎ}神社で4月第3日曜日に行われる春祭りにおいて、獅子舞神楽^{みこし と ぎょ}と神輿渡御^{みこし と ぎょ}を行う祭礼であり、豊作と悪魔祓いの願いが込められている。

②建造物

ア.八劔神社

八劔神社^{ぜ まんちようちよう}（千万町 町）は、日本武尊^{やまとたけるのみこと}、建御名方^{たけのみかた}命^{のみこと}を祭神とし、文永3年(1266)創建と伝えられ、同年の棟札が残されている。三間社流造^{さんげんしやながれづくり}の本殿は、絵様^{えよう}などの様式から江戸時代後期の文化年間(1804～1817)頃のものとは推定されている。



図2-7-2 八劔神社

③活動

ア.千万町の神楽

千万町^{かぐら}の神楽は、八劔神社で4月第3日曜日の春祭りに豊作と悪魔祓いの願いを込めて奉納される神楽(県指定無形民俗文化財)である。

宝暦元年(1751)の文書には、この年の祭礼で神楽を舞ったという記録が残っている。ここで奉納される神楽は獅子舞神楽である。獅子の頭をつけ女物の着物を身につけた舞方が舞うため、嫁(娘)獅子神楽とも呼ばれ、その起源は歌舞伎を取り入れた獅子芝居であるとされる。その神楽の構成は、舞方^{あとじかた}・後持方^{あとじかた}・笛方(2人)・太鼓方^{ごへい}・囃子方^{ごへい}〔太鼓・歌方(2人)〕で、獅子は御幣と鈴を持って「幕の舞」と「鈴の舞」を神社拝殿で奉納する。

祭礼当日、午前8時より関係者が神社にて幟^{のぼり}、神輿^{ししがしら}、獅子頭^{ししがしら}等の準備を行う。午前9時から八劔神社境内の矢場^{やば}では祭礼弓の参加者が弓射^{きゅうしゃ}を始める。金的に的中するまで神輿渡御のオネリ(お練り)はできないとされ、弓射は祭礼の重要な役割を担っている。弓射と並行して、午前10時に開始される神事の後半で神楽が奉納される。午後2時頃には、送り囃子が奏されるなか、若宮社への神輿渡御となる。囃子の音



図2-7-3 千万町の神楽 神楽奉納(ホラの舞)



図2-7-4 千万町の神楽 八劔神社での神楽奉納

を聞き、集落の人々が行列に加わる。若宮社に到着すると、神官らの参拝が行われ、その後、神楽が先程よりも賑やかに舞われ、見物人を楽しませる。午後4時頃、戻り囃子が奏されるなか、神輿は若宮社を後にして八剱神社へ還御する。



図2-7-5 千万町の神楽 御輿渡御巡行図

④まとめ

囃子が奏されるなか、集落の人々がお練り行列に加わる神輿渡御や、見物人を楽しませるように賑やかに舞う千万町の神楽からは、山深い厳しい自然環境の中で生きる人々の豊作と悪魔祓いの切なる願いが感じられる。

(3)須賀神社の祭礼山車と祭りばやしにみる歴史的風致

①はじめに

須賀神社の祭礼山車と祭りばやしは、「^{かしやま}櫛山の^{だし}山車祭り」と呼ばれる春の祭礼で、4月第2日曜日に、額田地区の中心である櫛山町のまちなかで山車と花車の巡行と神輿渡御、祭りばやしの奉納が行われる。

②建造物

ア.須賀神社

須賀神社(櫛山町)は、^{すきののおのみこと}須佐之男 命 等を祭神とし、本殿に永正10年(1513)の棟札があることから、室町時代後期には創立されていたことがわかる。^{にけんしゃながれづくり}二間社流造の本殿は、建築様式から18世紀中期の建物と考えられている。



図2-7-6 須賀神社

③活動

ア.須賀神社の祭礼山車と祭りばやし

額田地区の中心となっている櫛山町にある須賀神社では「櫛山の山車祭り」と呼ばれる春の祭礼が行われている。

祭礼(市指定無形民俗文化財)は、江戸時代から続くとされ、明治8年(1875)の『祭礼記』に当時の様子が記されている。旧暦6月の祇園祭として催されていたが、明治末期より4月14日となり、近年は4月第2日曜日が祭礼日である。山車の綱を氏子総出で曳く様子から、「^{ありこ}蟻子祭り」とも呼ばれていた。

春のうららかな日の中を芽吹き始めた山々を背景に、山車と花車に続き、提灯、^{のぼり}幟等のお手道具と神輿の行列が櫛山町内の^{おとこがわ}男川河畔にある神明宮までまちなかを渡御する。神明宮では祭囃子を奉納し、夕刻に須賀神社へ帰着する。現在、山車は4台あり、明治28年(1895)頃製作の竜神丸(原組)、同じころ能見町より譲り受け



図2-7-7 須賀神社から神明宮へ祭礼山車の巡行



図2-7-8 神明宮での祭囃子奉納(御照覧)

た恵比寿丸(仲組)、鳳凰丸(庄野組)、平成10年(1998)新造の新若丸(新居野組)で、河瀬・宮北市組は花組と称し、花車(チャラボコ)で参加している。祭囃子はこれらの山車の上で演奏され、囃子の伝承には、それぞれの組が工夫・努力をしている。

また、神明宮で行われる年番の組による「御照覧」は囃子を神に奉納するだけでなく、囃子の型を守り伝える意味もある。

祭りの準備は、前日に御照覧舞台作り等の準備を行い、当日は朝から各組が山車の飾り付けを須賀神社境内で行う。御神体を神輿へ移す時は、拝殿の幕が降ろされ、神主と神輿を担ぐ者以外は拝殿より外に出る。以前は、3月下旬から須賀神社の傷んだハギコ(ハギの枝製玉垣)を替えるため、ハギコ集めをすることから始まった。ハギコ作りは年番の役目で、祭礼の2週間程前に傷んだ所を作り変えていたが、平成28年(2016)に白壁塀となった。

祭礼は午前11時30分、山車のお祓い後に年番組を先頭に宮出となる。4台の山車に続き、お手道具(御神灯、梵天、赤提灯、鉦等)、神輿と続く。午後1時頃、地区の中心にある四叉路の辻¹にて中休みをし、ここで花組が合流する。辻の特設舞台では余興が行われ、午後2時頃神明宮に向けて出発する。神明宮に到着後、式典及び「御照覧」が行われ、年番を務める2組がそれぞれ特設舞台において、囃子を披露し、午後3時30分に神明宮を出発する。午後4時30分頃、須賀神社前に到着し、祭りのクライマックスともいえる境内横の急な坂を順次、山車、花車を上げていく。

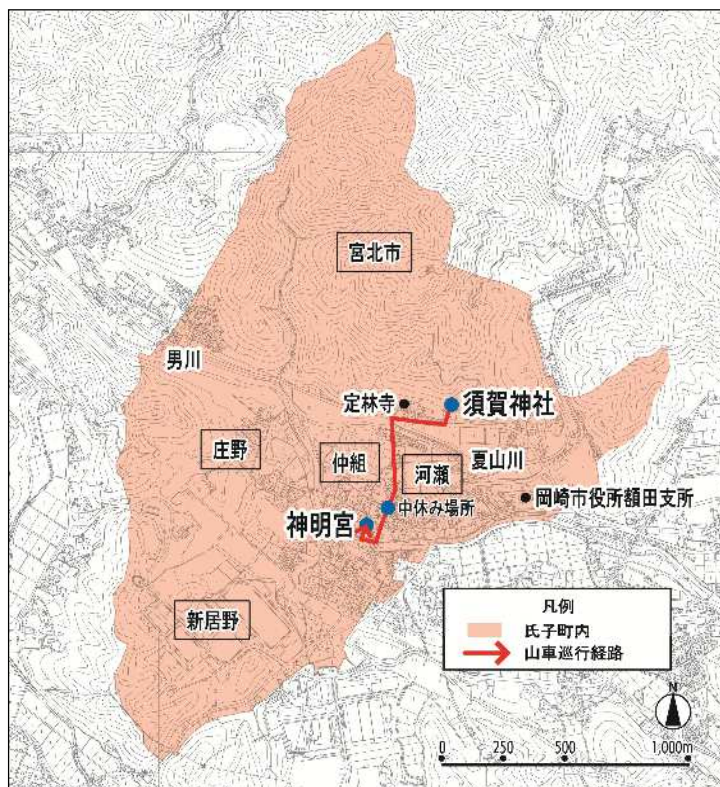


図2-7-9 須賀神社の祭礼山車巡行図

④まとめ

須賀神社の祭礼山車と祭りばやしは、春のうららかな日に新緑の山々を背景に山車と花車、神輿の行列がまちなかを渡御し、祭囃子を奉納する祭礼であり、額田地区の春の風物詩としての風情が感じられる。

¹ 地区の中心であり、余興・休憩の場所。

(4) 夏山八幡宮の火祭りにみる歴史的風致

①はじめに

夏山八幡宮^{なつやまはちまんぐう}の火祭りは、旧暦9月9日近くの日曜日に行われ、生木を積み上げた「ソダ山」に火をつけ、面を被った鬼がソダ山から燃え木を持ち、境内の参拝者を追い回す勇壮な火祭りである。

②建造物

ア. 夏山八幡宮

夏山八幡宮(夏山町)は、平針^{てらだいら}、柿平^{かきだいら}、鬼沢^{きさわ}、寺野^{そうじがみ}の5集落の総氏神で、由緒書によれば、額田部貞春^{ぬかた べのさだはる}が三河国夏山郷柿平を開き、継体天皇25年(531)に祖神を祀ったのが始まりとされ、元慶4年(880)に応神天皇^{おうじんてんのう}始め、6柱を合祀して王宮八幡宮と称し、後に夏山八幡宮と改めたと伝わる。棟札によると、一間社流造^{いっけんしゃながれづくり}の本殿は明治27年(1894)、拝殿は明治12年(1879)、



図2-7-10 夏山八幡宮

神楽殿(舞殿)は昭和10年(1935)の建立である。舞殿は、幣殿^{へいでん}と拝殿の間に建てられている。また、火祭りに使用したといわれる永禄元年(1558)の銘のある獅子頭が宝物として伝承されている。

③活動

ア. 夏山八幡宮の火祭り

夏山八幡宮の火祭り(市指定無形民俗文化財)は、旧暦9月9日近くの日曜日に夏山八幡宮境内で行われる勇壮な火祭りである。町内の柿平・平針地区が1年ごとに当番となり、祭りを執行している。1年交代で、祭りを行うようになったのは、明治36年(1903)からである。

火祭りの準備は当日の午後0時30分頃から行われる。境内周辺の森から鉈でスギ・ヒノキ以外の生木を伐採し、拝殿前の広場に高さ3メートルほど積み上げて「ソダ山」を築く。そして厄男や若者から選ばれた「太夫^{たゆう}」と呼ばれる鬼役が、白装束に身を包み水垢離^{みずごり}し、潔斎^{けっさい}で行う。水垢離^{みずごり}の場所は、担当の集落で異なる。柿平は



図2-7-11 夏山の火祭り ソダ山の点火

八幡宮裏手にある集落の庚申^{こうしん}を祀る川の淵で、平針は集落の山中で不動明王を祀る滝である。その後、八幡宮に戻り、拝殿内で神火^{しんか}を熾^{おこ}し(火鑽り)、神降ろしを行う。この後、祭りはソダ山に火をつけて、面を被った鬼と鬼の師匠的な役割を果たす「ババ」が様々な所作事^{しよきごと}を行うことで進んでいく。鬼はババの所作事を真似るが、上手く真似られないとソダ山から燃え木を持ち、境内の参拝者を追いかけて回す。



図2-7-12 夏山の火祭り 火鑽り神事

参拝者は「ボケ、ボケ」等と鬼を囃し立てながら逃げ回り、両者が一体となって祭りを盛り上げる。鬼の持つ燃え木に打たれるとその年は病気にかからないとされる。



図2-7-13 夏山の火祭り 神降ろし



図2-7-14 夏山の火祭り 鬼追い

④まとめ

夏山の火祭りは、境内周辺の森から切り出した生木の山に火をつけ、燃え木を持つ鬼と参拝者の両者が一体となって祭りを盛り上げる。祭りからは急峻な山林の間の厳しい自然の中で生きる人々の厄除けと無病息災^{むびょうそくさい}の願いが感じられる。



図2-7-15 夏山の火祭りの位置図

(5) 額田地区の当屋祭祀にみる歴史的風致

①はじめに

当(頭)屋とは、神社の祭りや講等に際し、神事や行事の世話をする人、またそのイエのことをいう。当(頭)屋が重要な役割を担って神社の祭祀が行われるため、当(頭)屋祭祀という。現在、当(頭)屋は1年交代で務めることが多く、その選出は紙クジあるいは家並順や帳簿等の記載に基づき、輪番で行うことが多い。ここでは、宮崎神社の「オトウの神事」(オトウダイコン)と、石座神社の「神迎え神事」(アマザケトウ)を取り上げる。

②建造物と活動

ア.宮崎神社「オトウの神事」(オトウダイコン)

a.宮崎神社

宮崎神社(明見町)は、須佐之男 命 等を祭神とし、創立は菅生神社(菅生町)の由緒に天平宝治元年(757)に播磨国広峰社より牛頭天王を勧請されたと記され、このときに万足平より現在地に天王宮として遷座され、明治当初に宮崎神社と改称された。寛永9年(1632)の棟札が残されており、このときに再建されたと伝えられるが、一間社流造の本殿は、虹梁の絵様等からみて、江戸時代中期の元禄～宝永年間(1688～1711)頃の建立と考えられている。



図2-7-16 宮崎神社

b.「オトウの神事」(オトウダイコン)

奥平氏が武田氏と戦った滝山合戦(天正元年(1573))の戦勝祝いに端を発すると伝わるオトウの神事(オトウダイコン)は、神社の氏子全体の行事としてではなく、明見町の行事として旧暦11月1日に行われる、神迎えの神事である。神事は当屋制をとる祭祀で、オトウとは神事に用いるオトウダイコン(大根の味噌煮)を準備する役割を担う当屋を指す。オトウとなる社守は、毎年神事後にクジで2名選出され、明治32年



図2-7-17 オトウダイコンの準備

(1899)から昭和35年(1960)までの記録が納められた箱を引き継ぎ、前年度の社守2名と共に任にあたる。関連資料として、明治32年(1899)の『宮崎神社乃ぼり役記帳』が残されている。

以前は、オオトウ、コトウとイエを区別し、オオトウのイエが輪番で当屋を務めていた。神迎いの2日前からオトウダイコンの仕込みが行われる。使用する大根は各戸から2～3本集められ、皮をむいた後、長さ5寸(約15センチメートル)の輪切りにする。一昼夜かけて水煮及び調味液で味が染み込むまで煮込む。調理する大根は200～250本に及ぶ。このとき、同時に神饌の一つで「オシロジロ」と呼ばれる洗米をすり鉢で粉状になるまで搗り、水を加えてどろどろにした液状のものを準備する。当日、午前6時からの神事には各戸から男性1名が参列し、社守がオトウダイコンを献供して神迎えを行う。神事後、なおらい直会にてオトウダイコンが振舞われる。



図2-7-18 オトウダイコン



図2-7-19 オシロジロの振舞い

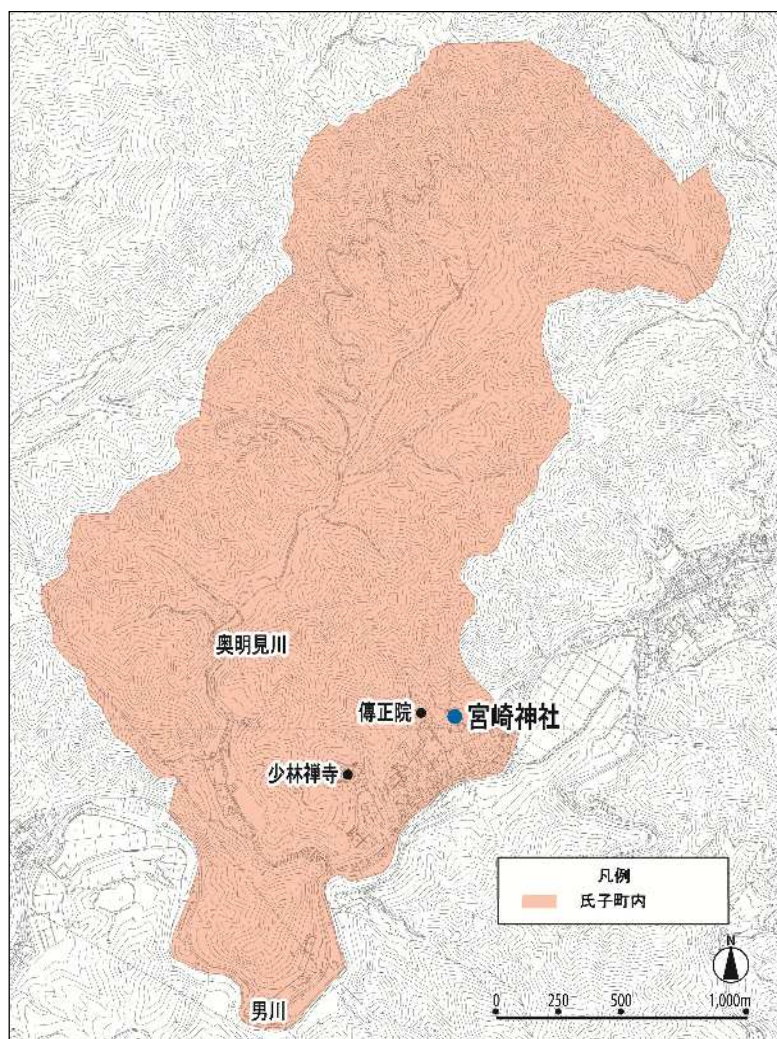


図2-7-20 オトウダイコンの位置図

イ.石座神社「神迎え神事」(アマザケトウ)

a.石座神社

石座神社(石原町)は、天照国照彦 天 火 明 命等を祭神とし、創建は明らかでないが、大正13年(1924)の『三河國額田郡誌』によると、南設楽郡東郷の式内社石座神社から勧請されたとされている。一間社流造の本殿についても棟札等の建立時期を示す資料はないが、虹梁や木鼻の絵様から江戸時代中期頃の様式と考えられる。昭和5年(1930)には拝殿、幣殿、渡殿が改築されている。



図2-7-21 石座神社

b.「神迎え神事」(アマザケトウ)

オトウダイコンの神事の1週間後に行われるのが、石座神社の神迎え神事、アマザケトウである。

アマザケトウは、神社の六座社に「シロジロ」と呼ばれる 菜 と大根で作った舟に白神酒(甘酒)を入れた神饌を供える神事である。神事の際に甘酒を献じる当屋をアマザケトウと称し、毎年4名がクジで選出される。選出されたアマザケトウは神事前日にオコモリをし、祭礼の準備と神饌の調整を行う。当日早朝には境内脇の室合地川で禊を行った後、神事に臨む。



図2-7-22 大根舟・甘酒・シロジロ



図2-7-23 シロジロ



図2-7-24 大根舟

(6)大代町と雨山町のコト八日行事にみる歴史的風致

①はじめに

大代町^{おおしろ}と雨山町^{あめやま}では、コト八日行事^{よう か ぎょう じ}²として、2月8日のコトハジメに田畑や山の仕事を開始するにあたり、悪霊を藁人形^{ひょう い}に憑依^{ひょう い}させて、子どもがムラ境まで送る「オカタ³送り」が行われている。

②建造物と活動

ア.大代町のコト八日行事

a.正泉寺

正泉寺^{しょうせん じ}(大代町)は曹洞宗^{そうとうしゅう}に属し、創建は永禄4年(1561)と伝えられている。本堂は寄棟造^{よせむねづくり}、トタン葺(旧茅葺)、周囲に瓦庇^{かわらひさし}を巡らしており、入口の大虹梁^{だいこうりょう}の絵様から明治・大正期の建立と考えられている。また、境内には安政2年(1855)の銘文がある釈迦如来等の石仏が祀られている。



図2-7-26 正泉寺

b.コト八日行事

昭和35年(1960)の『宮崎村誌』によると、大代町と雨山町では、2月8日に藁人形を作り、鉦太鼓^{かねたい こ}を打って送るコト八日行事が行われていた。大代町では、正泉寺に集合し、和尚による読経、お祓いが行われる。お祓いが終わると、子供たちは、鉦(1人)、太鼓(2人)、人形(3人)、御幣^{ご へい}(1人)の順番に並び、寺を出発する。鉦1回、太鼓1回「2月8日のコトハジメ」と唱えながら行く。大人は、子供たちを送り出すとすぐに百万遍^{ひゃくまんべん}の数珠^{じゆず}を取り出し、各戸より参加した大人たちが車座になり、念仏が始まる。子供たちは、集落境に到着すると、人形と御幣を置き、軽く拝み、元来た道を決して振り返らずに、寺まで言葉を発せずに帰っていく。寺に着くと、百万遍も終了となる。昭和30年代まではそれぞれの家で八日餅をついて準備をした。また、コトオサメ行事(12月8日)も昭和50年(1975)頃まで行われていた。

² コト八日とは、2月と12月の8日に行われる行事の総称であり、全国各地で様々な行事が行われる。2月8日をコトハジメ、12月8日をコトオサメと呼ぶ。(地域によっては逆になる。)

³ 憑依させる人形とコシのことを指す



図2-7-27 大代町のオカタ送り



図2-7-28 村境のオカタ場

イ.雨山町のコト八日行事

a.菩提院

菩提院(雨山町)は曹洞宗に属し、天文元年(1532)以前の創建で、棟札によれば元禄5年(1692)に本堂が建立されている。入母屋造、銅板葺(旧茅葺)、前面に広縁を通し、その奥に前後2列横3列の6室を構える方丈形式をとっている。禅宗寺院の本堂は方丈型が一般的であるが、ここではその前に露地と呼ばれる土間を通して点に特徴があり、前面土間六室型の平面形式をとっている。江戸中期の貴重な建造物である。



図2-7-29 菩提院

b.コト八日行事

雨山町のコト八日行事は、菩提院に集合し、和尚による読経、お参りが行われる。その後、子供たちは、鉦(1人)、コシに乗せた人形(2人)、ハタ(2人)の順番に並び、「2月8日のコトハジメ」と唱え、鉦を2回鳴らしながら行く。片道3キロメートルのオカタ場に到着すると、人形とハタを置き、手を合わせてお辞儀をし、振り返らず黙って帰る。



図2-7-30 雨山町のオカタ送り



図2-7-31 コシと人形

③まとめ

愛知県内で現在もコト八日行事を行っているのは、大代町と雨山町など数カ所のみで、全国的にも分布の西端である可能性が高い、この地域独特の行事である。急峻な山林の間に営まれる山里を背景とし、人口減少などで行事の存続が困難な状況になりつつあるなか、地域に息づく文化を伝承しようとする人々の強い結びつきが感じられる。

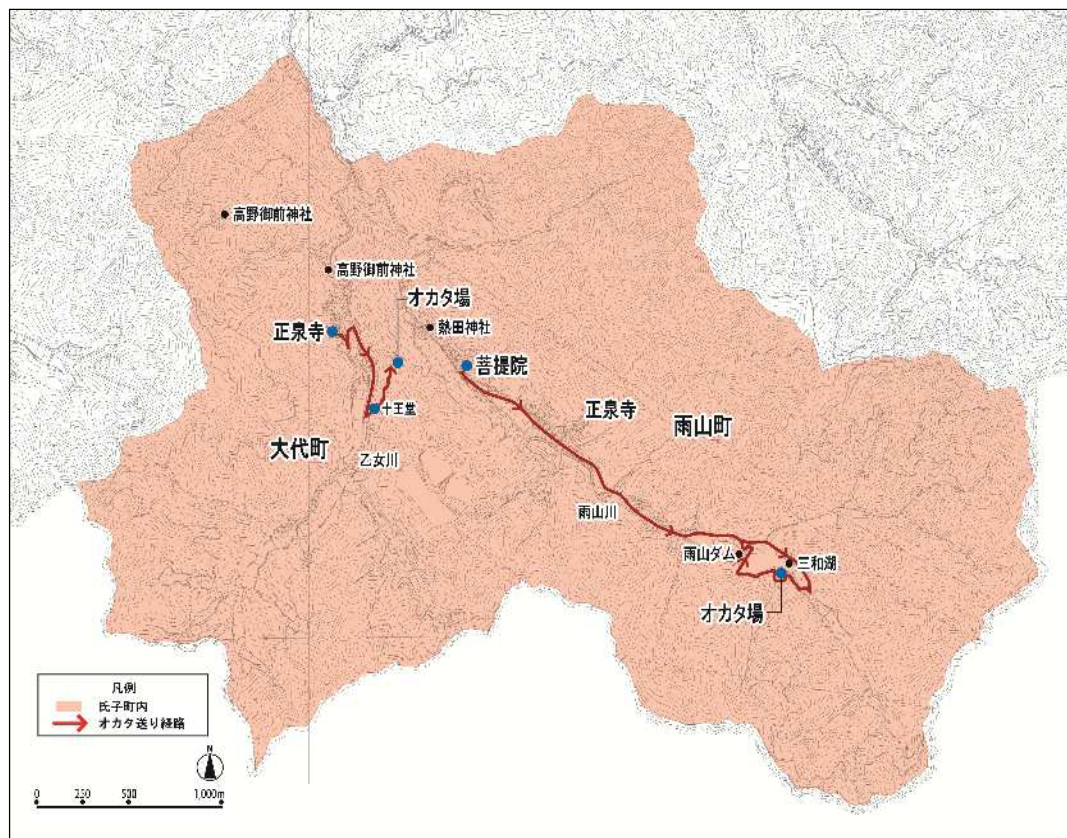


図2-7-32 オカタ送りの位置図

(7) 額田地区の猪垣にみる歴史的風致

①はじめに

額田地区の猪垣^{ししがき}は、山間地という限られた耕地を猪鹿等の獣害から守るために、額田地区南部の男川^{おとこがわ}水系に分布する領家片麻岩^{りょうけ ぺん まがん}を積み上げてつくられた。この地域に特徴的で全国的にも希少な文化財である。建造時期は江戸時代中期から開始され近代まで続いており、現在も地元の人々により保存・普及が図られている。

②建造物

ア.万足平の猪垣

猪垣の分布は、南部、特に宮崎地域が中心である。猪垣の主な材料である領家片麻岩^{せつり}は、節理により板状に割れるため、ほとんど加工せずに原石のまま石積みに利用できる利点があり、他の材料に比較して容易に築造できたものと考えられる。

猪垣は、高さ 1.6 メートル～2 メートルで、石を垂直に積むものが大半であるが、イノシシに飛び越えられないと思わせるように山側に反らせて積んだものも見られる。この地域に特徴的で全国的にも希少な文化財である。建造時期は江戸時代中期から開始され近代まで続いており、築造方法もいくつかの形態・様式が確認されている。その総延長は 50 キロメートル以上とも推計されている。

額田地区の中金町^{なかがね}有文書には寛政 4 年(1792)に「猪垣」の記載があり、石原町有文書には享和 3 年(1803)に「^{おびただ}夥しく^{まか}罷り出た」猪、鹿、猿を防ぐため「金子を借り入れ石垣を積み候」、天保 5 年(1834)「猪鹿之垣」とあり、近世から猪垣を築き耕地を獣害から守ってきたことが記録されている。

県指定有形民俗文化財の「万足平の猪垣」は、高さ約 2 メートル、底幅 1 メートル、上幅 0.6 メートルの造りで現存延長 612 メートルあり、文化 2 年(1805)と天保 3 年(1832)の 2 度にわたり築かれたという文献史料も残されている。



図2-7-33 万足平の猪垣(中金町)



図2-7-34 孫左衛門の石垣(淡洲町)

③活動

ア.万足平の猪垣の石積み

額田地区では、山間地という限られた耕地を補うため、緩斜面に平坦面を形成した石垣棚田や、猪垣、家屋の土台となる石垣等、人々の生活により密着した事象として石積み文化が発展し、その技術が今に伝わっている。

額田地区の中金町有文書には、寛政4年(1792)に猪垣が大破し、「百姓自力ニ修 難復成 候間御見分奉願上候」とあり、近世から猪垣を築き、修復してきたことが記録されている。



図2-7-35 石積み講習会の実施(万足平を考える会)

平成17年(2005)には、「万足平を考える会」(中金町)が地元で立ち上がり、地域住民や学生・児童への石積み講習会を実施し、保存・普及を図っている。

④まとめ

山間地の急峻な山林の裾と、耕地の境に整然と巡らされた猪垣に囲まれた田畑で耕作が行われ、時折猪垣などを修理するこの地域独特の様子からは、耕作地を大切に守ってきた人々の意志が感じられる。

表2-7-2 猪垣・シシ穴(猪を生け捕りにする落とし穴)所在一覧

町名	No.	小字名	町名	No.	小字名	町名	No.	小字名
滝尻	1	大小野	石原	27	梅ノ入	大代	53	長田
	2	長沢	鹿勝川	28	嶋		54	カラ沢
	3	長沢口	雨山	29	ヒガン田		55	サイカチ
	4	山下		30	栗タワ(シシ穴)		56	大洞
	5	上堺津		31	寺ヶ入(シシ穴を含む)	中金	57	万足平
	6	神田		32	東アワチ(石垣棚田を含む)	鳥川	58	森西上
	7	大野(石垣棚田、シシ穴)		33	ワセ田		59	小安道
	8	馬場(シシ穴)		34	宮ノ入		60	ハマイバ
	9	札木		35	川原	東河原	61	治平向
片寄	10	細久後	夏山	36	入ノコ沢		62	滝沢口
	11	山下		37	長崎		63	中川原
	12	上堺津		38	ヒシノキ(石垣棚田)		64	堂皆津
淡洲	13	大西		39	矢崎		65	貝津(シシ穴)
	14	滝野		40	金蔵		66	曲久保
	15	堂面		41	松川		67	草刈場(シシ穴)
	16	日向(孫左衛門の石垣)		42	香木		68	黒石
明見	17	黒谷		43	上向田(土塁形式のシシ垣)		69	ホドクチ
	18	田代		44	惣礼(土塁形式に近いシシ垣)		70	仲田
	19	妙慶	細光	45	上柿平	井沢	71	セドノ田(片面式)
宮崎	20	東原		46	細野前(大海家・藤井家)	桜形	72	上日影(両面式)
	21	宮脇		47	山畔		73	一本柿(両面式)
石原	22	室合内		48	大崎	鍛埜	74	日面(両面式)
	23	西横手		49	小源原		75	下切(石組)
	24	相野向	大代	50	林下	毛呂	76	柿金日影
	25	帝口(シシ穴)		51	大窪	大高味	77	大西(石垣)
	26	東横手		52	大明神			

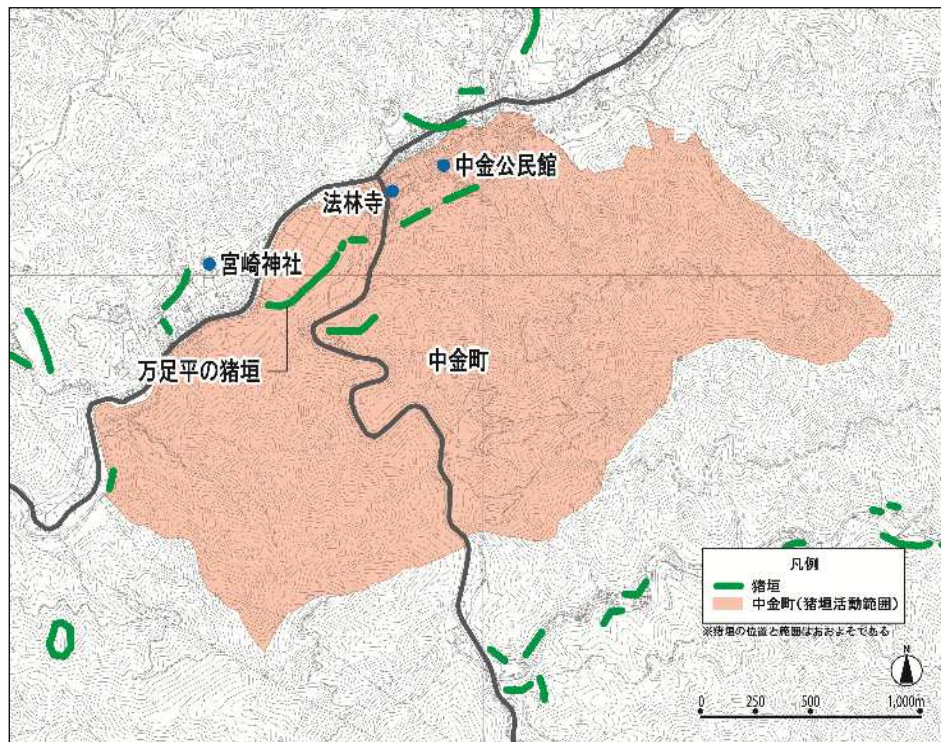


図2-7-36 万足平の猪垣関連の活動範囲

(8)おわりに

額田地区は岡崎市東部山地の急峻な山林の間に営まれる山里を背景としており、山間部に通じる街道により、岡崎市街、豊川市、信州とも関わりながら特有の文化を育んできた地域である。近世の額田地区には52か所ほどの村々があり、幕府領、大名領、旗本領、寺社領が入り組み、複雑な支配を受けていた。また、それ以前は豪族の支配拠点を中心に形成された村や戦乱を避けて住み着いた人々の村が混在していた。これら住民の歴史的、経済的な成り立ちから、様々な組織が生まれて強い結びつきが形成され、こうした結びつきから、毎年、男川本流の井堰^{いせき}から通じる用水路から田へ井道^{いみち}を普請し、また、炭焼きや茶の栽培等の生業も続けられている。

このように額田地区には地域の紐帯^{ちゅうたい}⁴の中心ともなる寺社や集落を舞台として、各地区の個性あふれる民俗行事と調和した景観が形成されており、山里のくらしとそこに息づく伝承文化が織りなす歴史的風致が感じられる。

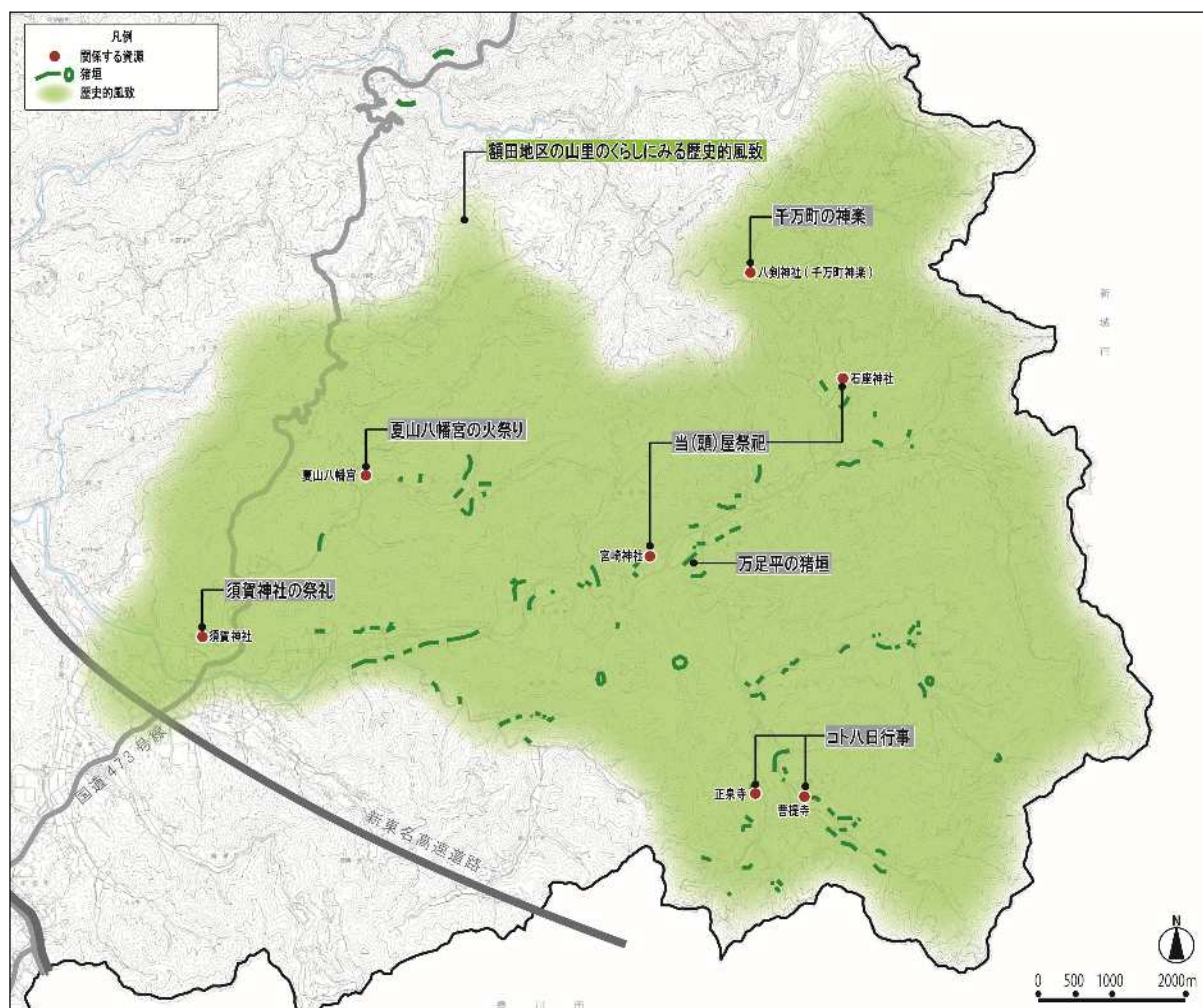


図2-7-37 額田地区の山里のくらしにみる歴史的風致の範囲

⁴ 社会を形づくる結びつき。